田中太郎　IN HUNTER×HUNTER（改訂版）

まめちゃたろう

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ハンター世界にトリップしたリーマンの話。

以前、にじふぁんに投稿していた物を元に大幅に書き直した物です。

最序盤はだいたい同じです。

念能力は変えてます。

目次

第一話【原作前】 1
第二話【原作前】 18
第三話【原作前】 32
第四話【原作前】 43
第五話【原作前】 68
第六話【原作前】 80
第七話【原作前】 100
第八話【原作前】 118

第一話【原作前】

梅雨の気配が色濃く残ったある日の朝。

何時ものように大音量の目覚まし時計に叩き起こされ、のそのそと万年床から起き上がる。

枕元のタバコに火をつけ大きく煙を吸い込むとぼやけていた視界と意識がはっきりしてきた。

「もう朝か……」

昨日は栄転する上司の送別会で深くまで付き合わされ、家にたどり着いて寝たのは４時を回っていた。

現在朝８時過ぎ。たった４時間弱の睡眠では疲れはおろか、酒さえ抜けていない。正直な所、今すぐ布団になついて爆睡したい気持ちで一杯だ。

重要な案件がなければ体調不良で休もう……そう思って、愛用の黒いスマートフォンを手に取りメールフォルダをチェックするとそんな俺の気持ちなどお見通しだと言わんばかりのメールが１件。

『取引先の朝倉様よりＴｅｌｌ有。打ち合わせを本日の午前中に変更したいとのこと』

合理的な同僚の性格がよくわかる簡潔すぎる文章に肩が落ちた。よりにもよって今日、それも午前中に変更したいとかイジメとしか思えない。

重い体に鞭打ちながらシャワーを浴び、コーヒーを胃へ流し込む。

ちらりと時計を見るともう8時半、始業時間は9時なのでギリギリだ。手早くスーツに着替えバックを掴んで玄関のドアを開けた……はずだった。

――――――目の前に広がるのは青々とした地平線まで続く草原。

気持ちのいい風が頬を撫でた。足元を見ると、子供の頃よくみた緑のバッタがぴょんと草の間から飛び跳ねた。

「……え？」

何度も目を瞬かせ確認するが結果は変わらない。

きっと疲れすぎたせいで幻覚でも見ているのだ。うん、きっとそうに決まっている。今すぐ会社に電話して休暇を取って寝なおそう。取引先には悪いがこんな状態ではまともに仕事になるはずがない。

そう思って後ろを振り返ると開けたはずのドアはそこにはなく、同じような草原が延々続いていた。心臓が早鐘を打ち、冷汗が伝った。

「落ち着け、俺。深呼吸だ、深呼吸。とにかく会社に連絡……」
この時頭を占めていたのは無断欠勤だけはやばいということだけだった。ぶるぶる震える手でポケットから携帯を取り出し、勤め先の部署を呼び出す。
プップップ……コール音がいつまで経っても聞こえない。画面を見るとアンテナ本数は0。
「圏外か……」
諦めて大の字で寝転がると嫌味なほど雲一つない真っ青な空が見えた。
「ここどこなんだよ」
こんな広い草原は俺が住んでいた東京にはなかったはずだ。北海道か、はたまた海外のどこかの国なのか。
夢であってほしいとは思うが、草の感触や土の匂いがそれにしてはリアルすぎた。
どれくらい経っただろうか、しばらくぼーっとしているとドドドドッという地鳴りが響き、大地が大きく揺れはじめた。
すわ、地震かと慌てて起き上がると遠い地平線の彼方に砂煙の様なものが立ち上っていた。
スーツに付いた汚れを払いながら立ち上がり、砂煙の方へと恐る恐る近づいていく。
「何だ……あの集団」

１００人くらいだろうか？　遠目にもよく鍛えられたマッチョと呼んで差支えない男たちが我先に地面に突き立ったポールへ殺到している。ある者は上にいるものを引きずりおろし、ある者は下にいる人間を蹴落としている。阿鼻叫喚の地獄絵図。まさにその言葉がぴったりな光景だった。

普段ならばこんな集団に近づこうなどど一ミリたりとも思わなかっただろうが、現在はいい年して絶賛迷子中なのである。わけのわからない状況で唯一の手がかり、逃すわけにはいかない。

「あの……すいません。少しお伺いしたいって！　ちょっ……ええ?!」

声をかけると返事の代わりに半死半生の人間らしきものが吹っ飛んできた。ピクピクと痙攣を繰り返しどうみても状態が良くない。

「だ、大丈夫ですか！　しっかりして下さい!!」

慌てて駆け寄り様子をみると手足がありえない方向に折れ曲がり、しかも腹部からは血が大量にあふれ出ている。どこをどう見ても重症だ。ポケットからハンカチを取り出し傷口を抑え止血にかかる。

「声聞こえますか？　返事して返事！」

「……うぁ…あ」

必死になって声をかけるとわずかにうめき声が聞こえた。

「意識ありますね！　よかった」
「ちょっとあんた」
「救急車呼びますからしばらくジッとしていて下さい。おじさん携帯持ってないですか？　俺の繋がらないんですよ」
「そこのあんた！　話聞きなさいよ!!」
　ドンと背中を押されて始めて近くにおじさん以外の人がいたことに気付いた。目線を上げると金髪のグラマラス美女が鬼のような形相で仁王立ちしていた。
「え？」
「え？　じゃないわよ！　全く、大事な試験の最中に何してるわけ？　許可もなく会場に侵入して受験生助けてんじゃないわよ！」
「あ……えっと……すいません。でもこの人かなりの重症ですよ」
「そんなの関係ないわ。死ぬのは本人の責任よ。ろくな修行もせずに試験を受けにくるからそういう目にあうの」
「いや……でも、もうこの人動けませんよ」
　何の試験かはさっぱりわからないが、どの様なものであれこのおじさんが続行不可能だということは確信できる。
「あのさ、私が試験官なの！　私がルールなの！　分かったらそこで正座しな!!　い

いっていうまで動くの禁止」
「了解しました……」
　この女性に逆らってはいけない。俺の本能がそう告げていた。とりあえず、おじさんの腹部に手を押し当てたままその場で正座する。おじさんは白目をむき意識を失ってしまったようだが、息はしている。
　視線を集団に戻すと人数は大分減っていた。周りには第2、第3のおじさん達が散らばっている。よく見るとポールの先に白い旗が何本か立っていた。
　これはあれか、小学校の時運動会でよくやっていた……。
「旗取り？」
「そーよ、正解」
「えらく物騒な旗取りですね……」
「ハンター試験なんだから物騒で当然よ」
「ハ……ハンター試験？」
「あんた、知らずに乱入したわけ？　まあ、いいわ。後で色々聞かせてもらうから」
　ハンター試験、その言葉で一つの仮定が頭に浮かんだ。
「ネテロさんとジン・フリークスさんって知ってます？」
「その2人を知らないハンターなんていないわよ。そろそろ黙りな。うざい」

「……すいません」

思わず頭を抱えたくなった。ＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲの世界とかどんなイジメだよ……。

スタート地点が流星街や東ゴルドーでなかった事には感謝しておこう。誰に対してかはわからないが。あんな所に落とされたら十中八九、１時間以内にお陀仏だ。

現在地点は不明だが、ハンター試験会場ということは人里からは離れているのだろう。ここで人に接触出来なければおそらく野垂れ死にしていたに違いない。

問題はこの後受ける予定の訊問にどう答えるか……だな。

いきなり異世界から来ましたとか、貴方たちはマンガ中の住人です、なんて話したって信じてもらえるわけない。よくて精神病院送りだろう。俺ならそうする。

年齢性別はともかく、出身地はどうしようか。

ジャポン出身だといっても市民コードを検索されれば一発でばれる。流星街出身だと言えばおそらく疑われないだろうが……いや、ダメだな。家にお帰りと流星街に放り込まれるのが落ちだ。

家を出て玄関開けたらここでした、他の事は何も覚えてない。で乗り切るしかない。

この世界には念があるし起きたことを念のような物と思い込んでもらえれば……。

ピーーーーっと甲高い笛の音が響いた。

「3次試験終了!!」

「あんた。ついてきな」

正座をやめて立ち上がる。足がしびれる前に終わってよかった。

「はい……あの」

「なに?」

「お名前をお伺いしてもよろしいですか?」

「3次試験官のダナ・コントルマンよ。遺跡ハンターやってるわ」

「俺はタロウ・タナカです」

「タローね。私のことはダナでいいわファミリーネームは嫌いなの」

「わかりました。ダナさん」

「とりあえずあの飛行船にいくわよ。そこで話を聞かせてもらうわ。ちなみに逃げようとしたら殺すから」

「絶対逃げません!」

一般人の俺がハンターから逃げれるわけもないし、逃げるつもりもないがさらっと言われた殺すという言葉に震え上がる。

人の命が紙のように軽いＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲの世界。気を抜けばさくっと死にそうだ。

案内された部屋には先客がいた。

一人は黒髪の浅黒い肌をした男というより少年といった方がいいような男性と、床まで届く長い髪の吊り上がった猫目を持つ細面の女性。

この２人も恐らくハンターなのだろう。

ビクビクしながらドアをくぐり、ドナさんに促されるまま中央のソファに座る。

「ダナ、これは何かしら？」

「私の試験の最中に乱入してきたのよ。話を聞こうと思ってつれてきたのよ」

「ふーん」

猫目の女性にジーッと上から下まで観察される。

「弱そうね」

「私もそう思う。名前はタロー・タナカ。あんた、どうやってここに来たの？」

タロウであってタローではないんだけどとおもいつつ、俺はしどろもどろに説明する。

仕事に行こうと思ってドアを開けて外に出たらあの草原にいた事。

今まで住んでいた場所や親の名前が思い出せない事。
たぶんなんらかの仕事についてたと思うが、それも思い出せない事。
話終わるとダナさんが盛大な溜息をついた。
「すっごい怪しいわ」
「俺もそう思います」
「タロー君でしたっけ。僕はリーシャン・マートといいます。ドアを開けたら草原だったという事ですが、その時いつもと違う感じはしましたか？」
よし来たとは思ったがすぐには答えない。答えを用意していたと思われては困る。頭を抑えつつ思い出すそぶりをしてから返答する。
「なんか……ぞわっとしたというか鳥肌が立ったというか……よく覚えてませんが」
「ふーん。アレかしら」
「アレって？」
「あなたには関係ないわ」
猫目の女性に一刀両断にされる。
「アレだとして記憶までなくなるものでしょうか」
「どうだろうね　こいつ垂れ流しだし。こいつ自身のアレではなさそう」
「とりあえず市民コードを検索したらどうかしら？　一般市民だったらお家に帰してあ

げればいいし、犯罪者だったら牢にぶち込めばいいわ」

俺の頭上でどんどん話が進んでいく。

「じゃあ、リーシャン頼むわ！　私パソコンとかよくわかんないし！」

「わかりました。タロー君、やましい事がなければ何も心配しなくていいんですよ。この機械の上に人差し指を乗せて下さい。すぐ終わりますからね」

女性2人とは違い、リーシャンさんは緊張と恐怖で真っ青になっている俺を安心させようと穏やかに優しく話しかけてくれる。これがいわゆる癒し系というやつだろうか。

そんなバカな事を考えている間に調査は終わったらしい。

パソコンから顔を上げたリーシャンさんの顔は少し曇っていた。

「ないですね。戸籍はおろかハンターサイトでさえ情報がひっかかりません」

「こいつ流星街のやつなの？」

ダナさんのにらみつける様な眼差しを感じ血の気が一気に下がる。

「りゅ……流星街って何ですか……？」

「あなた嘘をついてもしょうがないのよ？　正直に答えなさいな」

「そう言われても流星街なんて知りません」

ここが正念場だ。唇を噛みしめ知らないと繰り返す。

「あんた。私らをだまそうとしたってそうはいかないんだよ？」

ダナさんに腕をつかまれギリギリと締め付けられた。
「わかんないんです！　わからないものはわかんないんです!!」
今まで感じたことのない痛みに耐えつつ繰り替えし主張する。締め付けは更にきつくなり、骨が砕ける……そう思った瞬間、リーシャンさんがダナさんの手首をつかんだ。
「ダナ、かわいそうです。僕の前でそういうことはやめて下さい」
チッとダナさんが舌打ちし、ようやく痛みから解放された。
つかまれていた腕は骨折まではしてないようだがヒビは入っていそうだ。
熱を持ち、動かそうとすると激痛が走った。
「じゃあ、その持ってる鞄をよこしな。盗らないから」
「わかりました」
素直に渡すと、開けられソファの前のテーブルに逆さにしてぶちまけられた。
「これは……」
リーシャンさんの気を引いたのはパソコンではなく、本だった。
俺は重度の活字中毒で、鞄の中には常に何冊も本を入れている。
通勤の電車の中でも、食事中でも本が手放せないし活字がなければ生きていけない。
大げさだと思われるかもしれないが同じ活字中毒の人がいればわかってくれるはずだ。

俺の活字中毒は筋金入りで、小学生の頃から授業中、休憩時間、はてはお昼休みまで図書館で借りた本を読んで過ごしていた。

授業が終わった後も司書の先生に追い出されるまで図書館にいたほどだ。

こんな性格だったので友達なぞ出来るわけもなく、社会人になるまで家族以外と出かけたことすらなかった。

高校を卒業し、働きだしてからは生活費以外の給料は本の購入やたまに行く漫画喫茶代に消えていった。

とりあえずＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲを読んでおいてよかった……結構好きだったし何回も読み返していたから内容は結構覚えている。

余裕ができたら調べて今がどの時期か調べよう。原作開始のハンター試験が２８７期だったはずだから、そこを起点にすればばっちりだろう。

本音を言うなら原作キャラに会ってみたいが、一般市民の俺があんな化け物連中に関われば死ぬだけだ。時代が原作前ならハンター試験が終わったあたりで天空闘技場のＴＶ中継をチェックすればゴンとキルア、ヒソカなら見るだけはできるかもしれない。

「タロー君はこの本が読めるんですか？」

軽く脳内トリップしているとリーシャンさんから本を差し出されながら質問された。

「読めます」

「読んでもらってもいいですか？」
開いてもらってるページを端から読んでいく。
見開き２ページを読み終わるとリーシャンさんから質問攻めをくらった。
いわくなんで読めるのか。
この本はどこで手に入れたのか。
他の本も読めるのか。
誰かに翻訳を師事していたのか。
など俺の身上調査そっちのけで本に関する質問ばかりだ。
女性２人はリーシャンさんの勢いに押されてポカンとしている。
「タロー君は戸籍がないようですし、現時点で住むところも職もないでしょう。僕の所に来ませんか？」
「え……？」
「ちょっとリーシャン！　正気なの!?」
「僕は古書ハンターをやっています。この本は見たことがありませんし、ぜひ読みたいんですよ」
リーシャンさん同類だったのか……。
行く当てのない俺にとってこの申し出はとてつもなくありがたい。

「お願いします！」
「あんたも簡単に乗るんじゃないわよ！」
ダナさんがギャーギャー言ってるがそんなの関係ない。
「ダナ、僕がちゃんと監視して教育します。争いごとはあまり好きではありませんが、もしタロー君が何か悪事に手を染めてたりしたら僕自身の手で処理します」
処理……殺すって事だろうとは思うがようは悪いことをしなければいいのだ。
俺に犯罪を犯す様な度胸はない。
「絶対に迷惑をかけません。お願いします」
「しょうがないわね。リーシャンたら甘いんだから」
「まったくだわ」
「手続きは僕がやります。試験前から僕が取っていた弟子で少し問題が起きたので連絡を取るために追いかけてきたという事にしましょう」
「あ、ありがとうございます！」
「では僕の部屋に行きましょう。荷物をまとめてついて来て下さい」
リーシャンさんの個室に入ると俺をベットに座らせ、目を覗き込みながらふんわりと笑った。

「タロー君」
　穏やかな声と共に暖かい手が優しく前髪をすいていく。
「君が何か隠しているのは僕や他の2人にも分かりました」
　はっとして顔を上げる。
　しまった……反応してはいけなかったのに。
「僕はそれを責めません。これ以上何もタロー君が話してくれるまでは聞きません」
「リーシャンさん……」
　顔が目がだんだんと熱くなる。
「貴方は今日から僕の弟子です。過去はどうでもいいとはいいません。でもひとまず置いておいて一緒に楽しく生活しましょう」
　ぽろりと涙がこぼれると、次から次へと滝のようにあふれ出してくる。
　俺もういい年なのにおっさんに近いのに……そう思うが止まってくれない。
「師匠と呼んで下さい。弟子を取るのは初めてなのでつたない所があるかもしれませんが、少しずつやっていきましょう」
「し……師匠」
　俺の涙腺は決壊した。
　わんわんと泣き叫びながらただ、ありがとうございますと繰り返す俺をリーシャンさ

ん……師匠は何も言わず、泣きつかれて眠るまでぎゅっと抱きしめてくれた。

第二話　【原作前】

遠くから僅かに聞こえてくる話し声に刺激され、意識がゆっくりと浮上する。瞼を開けると少し灰色がかった天井が見え、周囲に視線を移すと、光源である丸いランプの横にスープ皿と可愛らしいカゴに入ったバケットが置かれていた。

そのままボーっとランプの光を眺めていると脳裏にじわじわとリーシャンさん……俺より遥か年下に見える師匠に抱き付き、泣き喚いた記憶が蘇ってきた。

「恥ずかしすぎる……っ！」

三十路に足を突っ込んだいい年した男が情けない。いくら安堵したからといってあれはないだろう。

羞恥心で顔が暑くなった顔を枕に押し付け、なんとか忘れようと必死に努力を繰り返すが上手くいかない。

「あーー、もう！」

両頬をパンッと叩いて黒歴史を胸の奥底に厳重に鍵をかけて封印し、勢いよくベットから飛び出す。

泣きすぎたせいで目が腫れぼったく、ヒリヒリする。

顔を洗ってすっきりしようと洗面所に入りジャケットを脱いでYシャツの袖を捲り上げた。

「これ……」

ダナさんに痛めつけられた腕に包帯が巻いてあった。きっと師匠が手当してくれたのだろう。

試しに腕を捻ったり回したり動かしてみるが、あの時の様に激痛が走ることはない。

包帯を少しずらしてみると少し紫に変色していた。

気持ち悪い色だが幸いヒビも入ってなかったようで、この分だと完治はすぐだろう。

包帯を元に戻して蛇口をひねり、何度も勢いよく顔を洗うとだいぶん目の腫れと痛みがましになってきた。

水滴を軽く払い、タオルを手に取り顔を上げると鏡の中の自分と目が合った。

「ん……?」

違和感を感じた。いつもの自分の顔と何か違う。ゆっくり指で顔を上から下へとたどるとつるりとした肌の感触。

――――髭がない?

一つ、違和感を見つけると急速に焦点が合っていく。

目尻や眉間にあった皺はどこにいった? それにこの歯はなんだ……タバコのせい

でどんなに磨いても僅かに黄色がかっていたのに、どうしてこんなに真っ白なんだ。
慌ててYシャツの袖を戻すと拳が隠れるくらい長い。ズボンもよく見れば引きずる程余っている。
一歩後ろに下がり鏡に全身を写すと、そこには高校生くらいにまで縮んだ己の姿があった。
子供扱いの原因はコレか……。
肩を落としてふとバスルームの小さな丸窓に目をやると、遠くにある町並みの輪郭がはっきり見えている。
眼鏡が無ければ手元の物さえぼやけていたはずなのに……これはあれか、ネット小説でよくあるトリップ特典というやつか。
もしかして筋力とかも上がってるんだろうか。
とりあえず試してみよう。

結果、腕立て伏せ5回。腹筋にいたっては1回が限界でした……。
どう考えても身体能力特典はない。
「わかってたよ……わかってたんだ」

己の過去を振り返れば当然の結果なのだ。
学生時代から本の虫で完全なインドア野郎だったし、体育の授業はサボれる限りサボっていた。
社会人になってからも運動と言えば家と会社の往復くらい。しかも階段が大嫌いで2階に上がる時でさえ、エレベーターやエスカレーターを使っていた生粋のもやしっ子である。
でも視力なんて眼鏡やコンタクトでどうとでもなるんだから、特典をつけてくれるなら筋力の方がよかったよ……。
どうしよう……この世界を生き抜けるのか自信がなくなってきた。
肩を落としてしょぼくれているとお腹がグーっと悲鳴を上げた。
そういえば起きてから何も食べてなかったのを思い出した。
こんな状況でも食欲が出るなんて俺は意外と図太いのかもしれない。
寝起きに見た食事を思い出しテーブルに近づくと、スープ皿の脇にハンター文字らしき物で書かれたメモが置かれていた。
たぶん俺へのメッセージだろう。ハンター文字が読めないので推測だけど。
食べていいものか少し迷ったが空腹に負け、ラップを外して添えられたスプーンを手に取った。

スープは大きな具がゴロゴロ入ったクリームシチュー。バケットと一緒に口に入れると信じられないくらい美味しかった。

皿を舐める勢いで完食しスプーンを置いた所でノックと共に師匠が部屋に入ってきた。

「体調はどうですか？」

相変わらずの優しい声。

「はい、大丈夫です」

「食事は口にあったようですね。これから飛行船は４次試験会場に到着します。僕の試験はもう終わっているのですが、試験官は最終まで試験に拘束されます」

師匠は向かいの席に座りゆっくりと俺の頭を撫でた。

「最後まで試験について行かければならないというだけで特に仕事はもうありません。タロー君、僕と少しお話しましょうか」

「わかりました」

まるで幼稚園児にでもなったみたいだ。師匠の目には俺は何歳くらいに見えているんだろうか。

気になるが怖くてまだ聞けない。

師匠はいくつくらいなのだろう？　容姿だけ見れば少年の様だけど、言葉遣いは丁寧

で雰囲気が落ち着いていて貫禄がある。もしかして念の影響で若く見えているだけなのかもしれない。

「僕に聞きたいことはありますか？　何でもいいですよ」

何でもいいが一番困る……色々あるが、とりあえず切羽詰まったハンター文字かな？

「あの、これが読めなくて」

「崩しすぎて読めませんでしたか？　この食事はタロー君の為に用意した物なので気にせず食べてください。それから部屋の外には気が立った受験者も一緒に乗っているので、部屋から出ないようにして下さいと書いてあります」

「あの……この文字が読めないんです。よろしければ教えてもらえませんか？」

「あの本の文字が読めてハンター文字が読めないんですか？」

師匠の目がスッと探るように細まった。

怪しまれるのはわかっていた。でも独学では日本語との対応表なしでは覚えられそうにないし、これも戸籍と一緒ですぐにバレる問題だ。

だったら正直に教えを乞う方がいいと思ったが……手のひらを返されて放り出される可能性もある事に気づいた。

困って言い訳を考え始めると師匠の表情がゆるんだ。

「何を心配しているのかわかりますが、タロー君は僕が面倒をみると決めました。僕は

一旦決めたことは覆しませんよ？」
「ありがとうございます！」
「ではまず、読み書きから勉強しましょう」
「はい！」
師匠に拾ってもらえて本当に良かった。
俺はこれから先一生師匠に頭が上がらないに違いない。
それから試験が終わるまで付きっ切りでハンター文字を教えてもらった。
あいうえお順なので読む方は比較的簡単に出来るようになったが、書く方が難しい。
書きなれた日本語と違い記号の様なハンター文字は、たった一文字書き取るだけでも驚くほど時間がかかった。
とにかく数を書いて覚えるしかない。
寝る間も惜しんで書き取りをする俺に師匠はずっと傍にいて、丁寧にアドバイスをくれた。
だいたい出来てくると次は文字数の少ない詩集のコピーを渡された。
小学生の教科書に出てくる『さくら、さくら、さくらがさいた』みたいな内容だ。
ハンター文字の横に日本語の書き込みが出来るように、わざわざコピーした物を用意してくれたらしい。

ありがたすぎて涙が出そうだ。

1か月ほどたち、読み書きがほぼ完璧になった頃になってもハンター試験は終わらなかった。

俺が拾われたのは3次試験の時だ。

ここまでかかるものなのかと疑問を投げかけると

「5次試験担当のバカが全員合格とかやらかしたせいで長引いちゃってね」

そう言って笑った師匠は顔は笑っているのに目が笑っていなくて怖かった。

師匠はかなりのイケメンなので怒ると一般人と違って迫力がある。

それから更に数日たってようやく試験が終わった。

まずは買い物に行くと言う師匠に手を引かれ協会近くのデパートに向かった。

「何を買うんですか?」

「タロー君の着替えや身の回りの物です。何も持ってないでしょう?」

「あ、そっか」

飛行船の中ではホテルのように毎日タオルやハブラシやら補充されていたから、すっかり忘れていた。

着のみ着のまま飛ばされたので、服はスーツしかない。試験中は師匠の服を借りて着

ていたけどいつまでもそのままじゃやっぱり不都合だ。
師匠の服でも少し引きずるんだよね……。
最低限、寝間着と普段着が2着づつ。それからハブラシに靴下があればいけるだろう。
支払いは師匠持ちなのでなるべく安くそろえたい。
そう思っていたのだが、デパートについた師匠の買い物は凄まじいの一言だった。
金銭感覚が狂っているどころかぶっ壊れているとしか思えない。
値札を見ないのは当たり前で、サイズさえ合っていれば服でも靴でも鞄でも片っ端からカゴに入れていく。
どんどん積み上げられていくカゴに焦ってそんなにいらない、少しあれば着まわすからと止めたのだが、
「お金の事は気にしないように」
とニッコリ笑って取り合わない。
せめてもの抵抗にカゴから商品を棚に戻したりもしたのだが、商魂たくましい売り場店員に邪魔をされ、カゴが床に置かれると同時にレジに運ばれていくようになったので諦めた。
つか、ショッキングピンクのズボンなんて絶対着ませんよ……。

精神が荒むばかりだったデパートの買い物で、一つだけ嬉しいことがあった。
真っ黒な分厚い日記帳を買ってもらったことだ。
「長く使うものですから、自分で選んできなさい」
そう言われて放り込まれた文具コーナーでガラスケースに入った分厚い日記帳に一目ぼれしたのだ。
日記帳の大きさはＡ４くらい。黒一色の装丁で右下にシルバーの小さな猫が埋め込まれている。デザインも好みだったが、何より気に入ったのが指紋認証キーがついていたことだ。
これになら他に漏らせない原作知識を書き留めておける。そう思った。
会計の時に見えたゼロの数に少し気が遠くなったけれども。
俺の月収３か月分か……。
笑いの止まらない店員さん達に見送られ、ようやく到着した師匠の自宅はヨークシンの郊外に建つ一軒家だった。
「誰にもばれていない家ですから安心ですよ」
若干怖いセリフを聞きながら玄関の扉をくぐる。
心配になったので恐る恐る聞いてみた。
「師匠は誰かに狙われているんですか？」

「僕は古書ハンターですから希少な本をかなり所持しているんですよ。本が好きな人は偏執的な方が結構多いですからね」

それはもしかして、どこぞの団長とか団長とか団長だろうか……。

聞きたいが何で知っているんだと突っ込まれると困るので聞けない。

「タロー君は本は好きですか？」

「大好きです！」

「気が合いますね。では僕の自慢の書庫に案内しましょう」

さらっと話題を変えられた気がするが、書庫と聞くと見てみたくてしょうがない。

案内されるまま２Ｆへ続く階段を昇るとなんとワンフロア全てが書庫になっていた。

「タロー君も読みたいものがあったら好きに読んで下さいね。ただし読んだ本は元に戻すこと、鍵のかかった本棚には決して近づかないこと。それだけは守ってください」

「わかりました」

「とりあえず何冊か持っていきましょうか。このあたりの物語は比較的読みやすいですよ」

師匠お勧めの本棚で何冊か本を選ぶ。

本は全てジャンル別に分けられ、あいうえお順に並んでいる。傷まないようにブックカバーがつけられ、背表紙には本棚の番号と何段目に入っているかを現す数字を書いた

シールが貼ってあった。
うーん、師匠具現化系かな？　神経質で几帳面。この本棚を見るとそうとしか思えない。

師匠に拾われてから1年はゆっくりと時間が過ぎていった。
生活は穏やかそのもので、ハンターの弟子になったとは思えないほどだ。というかハンター世界にいる気すらしなくなってきている。
師匠と出かける時以外はずっと家に籠りっぱなしで外にはほとんど出ない。
たまに仕事で師匠が家を開けるときもあるが、たいていは1週間ほどで帰ってきた。
「お金はありますからあくせく働く必要はないんですよ」
そう、師匠は笑いながら話した。
勉強は古代文明文字や歴史、経済、数学に機器類の操作、プログラムの組み方、果てはハッキング方法まで浅く広く教えてもらっている。
神字を習った時はかなり興奮した。
念のことは一言も話さなかったが、こういう文字もあるんですよとまるで他の古代言語と同じように教えてくれた。
どんな教科でも師匠の教え方は丁寧でわかりやすい。俺の覚えが悪くてイライラす

る時もあるだろうに常に優しくゆっくりと根気よく教えてくれる
習うこと全てが新鮮で目新しく、毎日が楽しい。
しばらく経ってから俺はいったい何歳に見えるのかと聞いてみたが、
「１４歳でしょう」
と凹みたくなるような年齢を返された。
さすがにそれはないと抗議したが、戸籍を１４歳で作りましたから１４歳で決定ですとびっくり発言をかまされた。誕生日は俺が話した日付になっているらしい。
というか戸籍って作れる物なのか……ハンターの権力すげえ。
師匠の年齢はというと、
「タロー君の３倍以上は生きてますよ。数えてないので正確にはわかりませんね」
更なるびっくり発言が飛び出した。
その見た目で４２歳以上……男版ビスケですか。妙齢の女性が聞いたら卒倒しそうだ。
そう言えば、師匠と出会ったハンター試験は第２７６期だったようだ。ゴンが受けた試験が第２８７期。
あの試験から１年経っているので今は原作から丁度１０年前にあたる。
今の目標は原作キャラを見に行くことだ。いや、だってせっかく飛ばされたんだし

やっぱり生で見たいよ。
正直言えば会って話もしてみたいが、それは流石に怖い。
狙うポイントは天空闘技場。ゴン、キルアが確実に見れるのはここだけだろう。　ヒソカもいるが、見向きもされない自信があるので問題ない。
その前はハンター試験にゾルディック、その後は蜘蛛にＧＩ、そして蟻だ。
興味本位で行ったら死にそうな所ばかりだ。
その点、天空闘技場なら心配ない。もし現地に行けなかったとしてもあそこならテレビ中継もあるし。２００階以上は追加料金が必要だけど、頑張れば十分払える金額だ。
安全と安心の為に腹筋と腕立て伏せは毎日続けている。空中プロテインはやはり実在したのか、一桁だった回数が夢の３ケタまで出来るようになった。
念の方はとりあえず起床後、就寝前に１０分程度づつ点を続けている。
１年たってもオーラの気配すら分からないが気長にやるつもりだ。
まあ、最悪１０年後までに使えるようになればいいや。

第三話　【原作前】

「師匠、携帯電話が欲しいです」
「電話はもうありますよ」
　いや、そういう意味じゃなくて。心の中で突っ込みつつ、プリントアウトしたヨークシンアルバイト情報を渡す。
「生活費くらい稼ごうかなと。ピッキングスタッフか検品スタッフなら俺でも出来そうなので応募したいんですよね」
　師匠に拾われて1年と少し。俺の状況を一言で言うならばおんぶにだっこ、衣食住全て師匠に頼り切っている。
　正直、今の状況はぬるま湯に使っている様で心地よいけれども３０歳を越えた男がこれじゃいけない。受けた恩は返す目途は立たないけれど、使わせたお金ならば少しづつ返せる。
　お金返すのが目的なのに携帯を強請るなんて本末転倒だけど、師匠の家は特殊すぎて1人だと中に入れないのだ。

多数の罠が張り巡らされているらしく、もし一人で外出することがあったら門の前で待ってなさいときつく言い含められている。勝手に入ろうとすると数秒で死体になるらしい。

この家はいつからゾルディックになったんだ……。

「帰る時に連絡するので」

「なるほど、それで携帯ですか。理由は理解できましたが許可はできませんね」

「どうしてですか?!」

「タローは僕の弟子です。弟子の本分は技術を継承することにあります。アルバイトをする暇があるなら勉強なさい」

「うっ……」

ぐうの音も出ない。全くもって正論である。でも、ここで負けたら独り立ちまでこの状況が続いてしまう。

新たな言い訳と共に口を開こうとすると師匠の手が遮った。

「タロー、よく聞きなさい」

「はい」

「僕は古代文字の専門家です」

「知ってますけど……?」

「大学で講義してくれとうるさい位依頼がきます」
師匠の知識は深く幅広いし、教え方も上手い上にイケメンだ。そりゃ殺到するだろう。簡単に予想できる事実だ。
一体何が言いたいのか首を傾げていると師匠はニッコリとほほ笑んだ。
「僕の講義は1時間3億です」
「はっ？」
「タローは1日8時間講義を受けていますね」
俺の顔が衝撃に染まった。
「1日24億……!?」
「ええ、1週間で168億ですね」
あまりの事実に力尽き床に倒れこんだ。
燃え尽きたぜ……真っ白にな……。
どうすんだよ、すでに8千億ジェニーを超えてるよ。
まあ、俺が金、金とうるさいから諦めさせる為の冗談なんだろうが……ちらりと横目で師匠を見るともうこの話題は眼中にないのか、本を読み始めている。
やっぱり気にしているのは俺ばかりってことだな。
うだうだ考えているとふと天啓が下った。

ほふく前進でにじり寄り師匠と本の間に割り込む。
「……師匠、ハンターになりたいです」
「いきなりですね」
怪訝な顔をする師匠に畳みかける。
「ハンターになって稼いで師匠に返します！」
「それは構いませんが、受け取りませんよ？」
「わかってます。ですから、師匠の口座をハントするハンターになります!!」
「え？」
珍しく師匠が困惑しているが気にせず腕を組みつつ得意げに考えを披露していく。
ハンターに必要なもの……武力にハンター証、他にも色々あるけれどもその一つが銀行口座だと俺は思う。
ハンター達が何かをする度でかい金が動く。一々銀行まで行って下ろして……なんてまだるっこしいことやってられるはずがない。そもそも億以上の金を持ち運ぶなんて不便だ。
つまり、口座を持ってないハンターなんていない。
師匠が受け取ってくれないならば口座を調べて無理やり振り込めばいいのだ。
「これならどうです！」

「理論は間違ってはいないですが……タローの思考はたまに突拍子もない方向にいきますね。」
「俺はごく普通の思考回路しかもってません」
「普通だったらハンターを目指すはずないでしょう。全く、そんな理由でハンターになりたいだなんて他の志望者が聞いたら激怒しますよ」
　こんなふざけた理由はダメか……俺自身は結構真剣なんだけど。
　未練がましく師匠をジッと見つめていると師匠は溜息をついて本を閉じた。
「まあ、いいでしょう。夜中にこそこそやっていたようですし」
「ほ、本当に?!　ってか、腕立てやってたのバレてたんですか」
「この家の中で僕にわからないことなんてないですよ」
　そりゃそうか、円とかあるもんな。

「今日はもう遅いからそろそろ寝なさい」
　そう言われたが、ワクワクしすぎてなかなか寝付けなかった。
　次の日、朝起きてすぐに動きやすいジャージに着替え、師匠の元へ行くとダイニングのど真ん中に素朴な木の机と椅子が置かれていた。

「まずはこの机と椅子を修行場まで運んで下さい」
素直に椅子と机を持ち、中庭へ運ぼうとすると待ったをかけられた。
「何か忘れ物でも?」
「どうして外に出るんですか。こっちに修行場がありますのでついてきてください」
さすがは師匠、徹底的にインドアである。
ダイニングを抜け、いつもは使ってない小部屋へ入ると師匠が壁にあるパネルを操作し始める。
ウィーンと機械音が聞こえ、しばらく待つと床がどんどんずれ階段が出来上がった。
「いつもタローが寝た後にこの下で自己鍛錬しているんですよ」
「なんか秘密基地みたいですね」
師匠と話しつつ下に降りるとそこはかなり天井の高い体育館のようなドでかい部屋になっていた。
書庫と広さも高さも同じくらいなんだそうだが本棚がないのと、照明が眩しいくらい明るいので印象が全然違う。
しばらくポカンと修行場を見ていた俺だが師匠に椅子を真ん中に持っていくよう声をかけられ我に返った。
軽い準備体操の後、まずは柔軟からと背中を押されたが俺の体は岩のようにガッチガ

チだった。
「痛い！　痛いです!!　これ以上曲がらないぃーーーー!!」
「ハハハ、タローは大袈裟ですね」
「違うから！　ホントに痛いから!!」
筋が切れるかと思うほど俺の背中を押す師匠の顔は今までで一番輝いていた。俺が痛がれば痛がるほどキラキラしていく師匠の笑顔。絶対ドＳの血が入っている。
柔軟だけで魂が抜けそうになったが、苦難の時間はすぐに終わりようやく修行と相成った。
「では端から端まで全力で走ってみなさい」
「はい」
端から端までといってもゆうに２００ｍはある。以前のもやしな俺なら走りきったら息が上がっただろうが、毎日続けた筋力作りのおかげか無様をさらすことはなかった。
だが――――。
「そうですね。今日はまず走り方から勉強しましょうか」
走り方ですか……まずはそこからですか。
「タローの走り方には無駄が多い。変な癖がついていますね」

「うう……」

「大丈夫ですよ最初からできるような人間はいません。気を落とさず基本中の基本から学んでいきましょう」

そうだよなあ……外で走り回った記憶なんて体育の授業だけだ。それさえこっそりサボっていたし、会社に遅刻しそうな時でも優雅に歩いていた。

スローモーションのようにフォームを作りながら進み、その度師匠から修正が入る。

「地を蹴った足はもう少し上に。腕はこの位置です。そう、そのまま頭を揺らしてはいけません」

その日は1日中、朝から昼食をはさみ夜まで走り方を徹底的に仕込まれた。

動作がゆっくりだから楽だと思いきや、かなり筋肉にきいている。

修行が終わった後、気になっていつもやっている腕立て伏せと腹筋を見てもらったが、それも体勢がおかしかったらしい。

早速正しいやり方でやってみたが、２つとも８０回が限界だった。

俺の1年って何だったんだろう。

それに追加で足首に錘をつけ椅子に座ったまま足を上げて行うトレーニングも新たに組み込まれた。

初めての修行から1週間は初日の内容の繰り返し。

準備体操に柔軟、軽く走りながらの走り方の矯正。途中で休憩や食事を挟みつつ最後に筋力トレーニング。

俺が走ってる時、並走している師匠は歩いてるんけど……マジハンターってどうなってんの。

しかし時折師匠のドSの血が見えるものの、翌日にひどい筋肉痛になるようなこともなく俺のペースに合わせて鍛えてくれた。

正直な所、ハンターになる為の本格的な修行と言われていたので血反吐を吐くような修行かと思いきや、内容はそこそこなし易い。

もちろん、全メニューが終わった後は全身汗だくだけれども。

超初心者用メニューが終わる頃には走り方もちゃんとしたものになり、次の段階へ移ることになった。

次のメニューからようやく基本的な体力作りである。

いつもの体操柔軟が終わった後、

「限界までマラソンしなさい」

そう師匠は指示すると俺が初日に持ってきた机に筆記用具を広げ、お仕事モードに突入してしまった。

放置っすか……目頭がちょっと熱くなってしまったが、仕事なら仕方ない。
とりあえず指示通り走り始める。
走り始めて2時間ほどで額にうっすらと汗が滲んだ。こんなに走れるようになったのか……以前とは全く違う自分に驚く。
さらに1時間走ると少し息が上がってきた。
「全力疾走に切り替えなさい」
マラソンペースだったからこそ3時間耐えれたのである。
全力疾走ではわずか10分で手足が上手く動かせなくなり、息も絶え絶えだ。
だが師匠に
「だめだと思ったらやめていいんですよ」
そういわれると条件反射でまだ大丈夫だと返事を返してしまう。
もちろんただのやせ我慢だが、止めていいと言われればつい意地になって続けてしまうのが男の子である。いや、見た目だけだけど。
結局床に倒れこみ動けなくなるまで走るはめになった。
その後、昼食をとることになったが自力で上まで上がっていけず、抱えて連れて行かれることになり俺の残り少ないプライドは砕け散った。
午後は夕方まで座学の授業。

内容は俺の希望を入れてか、プログラムやハッキングに関する知識や論文解釈に重点をおかれるようになった。今日の課題は師匠が作ったウィルスを駆逐するアンチソフトを作り上げる事。

試行錯誤しているうちに3台のパソコンがおしゃかになった。

嗚呼、数十万ジェニーが飛んでいく……。

夕方以降は筋力作り。

いつもの3種類各１００回を1セットとし、休憩をはさみつつ3セット。

最後は１０分間の瞑想を指示された。

終わったらもう動く気力もなくシャワーを浴びてベットにダイブ。

そんなこんなでそれからさらに1年ほどかけて一般人以下のもやしっ子から一般人より少し上程度のレベルまでいくことができた。

第四話【原作前】

その日はたまたま師匠が仕事で出かけ、一人で過ごしていた。

留守でも大量の課題を渡されるのでサボってだらだらなんて出来ない。というか全部終ってなければ正座で説教コースだ。

師匠はどんな時でも声を荒げたりなんてしないが、ただひたすら正論と理詰めでこんこんと諭される。これが結構堪える。怒られる前から自分が悪いのがわかっているし……。

さて、現在取り組んでいる課題は紀元前に滅びたといわれるトルエン文明文字で書かれた日記の翻訳、及び内容に関する小論文だ。

文字の形はハンター文字に少し似ている。だが難易度は比べ物にならない。例えば太陽を模した文字が表す意味は『太陽、初代国王、主神、日照り、災い』など多岐にわたる。前後を組み合わせ、最善となる文章を導かねばならない。

正直、難しすぎて大苦戦していた。

「紀元前６００年頃の物だからここはコルハト王かな。うーん……狩りでライオンをとった？　違うか。ライオンの頭を狩ってコルハト王に乗せた？　いや、変だ」

ノートに書いては消し書いては消し繰り返し綴っていくが、なかなかピンとくる文章にならない。
「コルハト王はライオンに馬乗りになってその首を落とした、じゃねーか？」
「あっ！　それだ」
謎がやっと解け、脳がクリアになった。一つ解けると詰まっていた文章がパズルの様に紐解けていく。
「だとすると、ここは水瓶で洗い祭壇へ捧げたになる……ん？」
「なんだ、まだわかんねーのか」
「いや、わかるけど……」
何故、俺以外の声が聞こえるのか。
恐る恐るノートから顔を上げるとそこには小汚いなりをした男が、ニヤニヤとどこか面白そうにこちらを眺めていた。
「……」
どうやって入ったのかとか、いつからそこにいたのかとか色々聞きたいことがあるけれど、とりあえず――――。
「……どなたですか？」
「リーシャンはいつ帰ってくるんだ？」

質問に質問で返すな。そう言いたいが気付かずにここまで接近される相手だ。下手に怒らせればどうなるかわからない。

眉根を寄せ、ジッと相手を観察しながら少しずつ距離を取る。地下の修行場まで逃げられれば……そう考え視線を扉へ移した瞬間、テーブルの向かいにいたはずの男が目前にしゃがみこんでいた。

身体を強張らせ瞬きすら出来なくなった俺に男は息遣いが聞こえそうなほど顔を寄せ、もう一度問いかけた。

「坊主、リーシャンはどこだ？」

「――――ッ!!」

考えろ、落ち着くんだ。恐怖心を無理やり抑え込み、必死に自分に言い聞かせる。

敵か味方かはわからないが、師匠の名前を知っているという事はおそらく知り合いだろう。怪しいことこの上ない風体だが、パッと見た感じ敵意は見えない。まあ、そもそも気付かずにここまで接近される相手だ。俺を殺す気ならとっくに死体になってる。

そして男は手ぶら。古書目当てでもなさそうだ。

つまり、男の目当ては師匠本人か。

緊張で乾いた唇を舐めようやく返答を吐き出した。

「師匠はここにはいません」

「ふーん、行先はどこだ？」
「知りません」
「いつ帰ってくるんだ？」
「聞いてません」
「警戒すんなって」
「貴方を警戒せずに何を警戒しろと？」
「あー……確かに」
男はぼさぼさ頭をかき回しながら何やら悩んでいるようだ。太陽の光に当てられたフケがキラキラと空中を舞っている。
掃除機かけなきゃな……そう現実逃避をしていると男が一瞬、真顔になった。
「リーシャンの弟子になってどれくらいだ？」
「……2年ほどです」
「トルエン文字以外も習ってんのか？」
「浅く広くですが……って何でそんなことを聞くんですか？」
なんだろう、凄く嫌な予感がする。
男はポンッと手のひらにコブシを打つと俺の首根っこを引っ掴んだ。
「じゃあ、坊主でいいや！　ちょっとついてこい」

「はあああああああああああああああああ?!」
　まさに青天の霹靂。警戒心と緊張はどこかに吹き飛ばされた。
「いきなり何言ってんですか!?　あんたの目当ては師匠でしょう!!」
「お前でもできそうだからな」
「できるって何のことですか?」
「古代文字の翻訳」
　なるほど、それで師匠を探していたのか。疑問は解けたが着いていく気などさらさらない。
「出来るわけないでしょう!　確かに古代文字はある程度習いましたが師匠に比べたらひよっこもいいとこです!!」
「お前ならやれる。諦めてついてこい」
「無理です!　それに俺は修行中でここから離れられません。師匠が戻ったら必ず伝えますから、もう帰って下さい」
「修行なら俺がつけてやるから安心しろ」
「結構です。それに知らない人についていっちゃいけませんって言われてますから!!」
「俺はジン・フリークスだ。これで知らない人じゃないだろ?」
「ジ……ン……ッ」

ジン・フリークスってあのジン？　ゴンの親父のジン？

あまりの衝撃的な事実に固まっているとヒョイっと肩に担がれた。

「え？」

「飛ばすからしっかりつかまってろよ」

「ちょっ！　待ってくだ――」

「口閉じねーと舌かむぞ」

ジンさんはそう言うやいなや、窓を蹴破り宙を飛んだ。あっという間に我が家が豆粒のように小さくなっていく。

景色がどんどん流れ移り変わる。

人間ってここまで早く走れるのか……そんな風に冷静でいられたのはほんの一瞬だけ。すぐに全身にかかる重力と風圧で内臓が圧迫され、瞬きどころか呼吸さえ困難になった。

止めてくれ、苦しい。そう訴えたいのに口を開けない。

せめて振り落とされないようにギュッとジンさんにしがみつくしかなく、やがて意識はスイッチを切るようにあっさり落ちた。

どれくらいたったのかはわからない。冷たい何かで顔や手足を拭われる感触がして薄く瞼を上げる。
最初に目に入ったのは見事な金色。
「おい、大丈夫か？　こんな子供に無茶しやがって……」
少し掠れた低い声の主が心配そうに俺を覗きこむ。
「俺……」
「気がついたか？　お前、ジンさんに運ばれてくる途中で気絶したんだよ」
「そうですか……面倒を見て下さりありがとうございます。俺はリーシャン・マートの弟子でタロー・タナカです」
「俺はカイトだ。よろしくな、タロー」
「カ……カイトさんですね。よろしくお願いします」
「カイトさんとか気持ち悪いからカイトって呼んでくれ。起きれるか？」
「はい」
鋭い三白眼が僅かに緩んだ。笑ったのだろうか。
ふらふらしつつも何とか立ち上がり、目前に立つ少年……カイトをジッと見つめる。
原作では生年月日不明だったから推測しかできないが１０台後半くらいだろうか。
特徴的だった長髪は今はまだ短く肩に届く程度でしかない。サッシュがきつく巻か

れた腰の位置は驚くほど高く嫉妬の炎が溢れてきそうだ。
何を隠そう、原作キャラの中で一番好きなのがカイトだった。俺の理想にドンピシャだったのだ。
蟻編でピトーに殺された時はリアルに泣いたし、幼女に転生したのはショックだった。なんでＴＳしてんだよって素で突っ込んだ。
でも、幼女なカイトちゃんにも痺れた。思わず姉あねさんと呼んでしまいたくなったくらいだ。
そのカイトがいる。２次元ではなくそこに確かに生きているカイトがいる。
感動していた。只々、感動して息をすることすら忘れた。
「起きたか、坊主」
ジンさんに背後から肩を軽く叩かれ現実に引き戻された。いい気分を邪魔され、恨みつらみ罵詈雑言が心の奥底から湧いて出る。
「ええ、起きましたよ。誘拐犯」
「誘拐犯?!　ジンさんまさか……」
カイトが蔑むような目でジンさんを見た。
「なっ……違ーよ」
「どこがどう違うんですか?」

俺の姿は酷い。やっぱり運ばれる途中で嘔吐したのか服には黄色いシミがこびりついているし、靴も履いてない。

更に攫われた経緯を一から十まで説明するとカイトは完全にこちらの味方になった。

「ジンさん……あんたって人は……」

「あー、わかったわかった。俺が悪かった！　これでいいだろ?!」

ジンさんは流石に分の悪さを自覚したのかやけくそのように叫んだ。

うん、絶対反省とかしてないよね。

「もういいです。それより家に帰してくれないなら師匠に連絡くらいして下さいよ」

「おう、まかせとけ」

不安だ。激しく不安だ。でもこればかりはジンさんを信用するしか術がない。

「坊主、ついてこい。見てもらいたい物があるんだ」

「坊主って呼ぶの止めてもらえません？　俺はタローです」

「おう、タローな。とっととついてこないとまた運ぶぞ」

しぶしぶジンさんの後についていくと深い森林の谷間に緑に輝く扉があった。

俺の身長の3倍はあろうかというその扉には真ん中に丸いプレートのようなものがはまっており、そこに古代文字がびっしりと書かれていた。

「すっげーだろ！　どうもプレートを外さないと中に入れないみたいでな。外し方は文

字を翻訳すればわかるはずだ」
「読めもしないのに何で外し方がわかるって思うんですか」
「勘!!」
「はぁ…」
　俺とカイトはそろって溜息をついた。
　カイトとの友好を深めたい気もするが師匠が心配するし、早く解読を終わらせてとっとと帰ろう。
　しかし、習った事がある文字で本当に助かった。所々わからない所があるがなんとかなるだろう。　枯れ木を一本拾い、地面に書き込みを始めた。

　やっとのことで作業が終わると辺りは暗くなり星が出てきていた。
「出来そうか?」
　カイトが心配そうに声をかけてきてくれた。
「何とか終わりましたよ、分かる文字で良かったです」
「早いな。ジンさんあの扉の前で3日くらいうんうん唸ってたと思ったらいきなり走っていったからどうなることかと思ってた」
「説明もなしにですか……物凄いですね」

帰ってきたと思ったら子供抱えてるから本気でビックリしたとカイトは笑いながら話す。
「タローも凄いよ。半日もせずに解読できたんだしな」
「師匠に付きっ切りで教えてもらってるんです。これくらいできないと怒られてしまいますよ。カイトも凄いじゃないですか。ジンさんの弟子なんですから」
あのフリークスについて行けるだけで凄い。
俺だったら1日ももたずに死んでそうだ。
「ジンさんの弟子だからで納得しそうなのが嫌だな……」
ぷっと同時に吹き出した。
カイトがジンさんがいかにひどい師匠か身振り手振りで説明してくれる。
その内容がおかしくて2人一緒に大笑いしてしまった。
俺は笑いを納めると、カイトに向き直り顔を見つめる。
どうしても言いたい事があった。
「カイト、俺って友達いないんですよ」
「いきなりどうした？」
「今までずっと師匠と2人っきりだったんです。ぜひ友達になって下さい」
「タロー、お前……」

やっぱり突然すぎただろうか……無言になったカイトに耐え切れず視線を地面に落とす。

カイトに会うまで友人を欲しいと思ったことなんてなかったから、直接頼む以外思いつかなかった。

ネットで調べてから申し込んだ方が良かっただろうか。

ぐるぐるバカな考えに囚われていると節くれだった大きな手が差し出された。

意味がわからずカイトを見返すと軽く頭を叩かれた。

「友達になるんだろ？　ほら、お前も手を出せ」

「う、うん」

慌てて差し出した手のひらがきつく握られた。

「これからよろしくな」

「はい！」

人生初の友達に最高の笑顔を返した。

「いやー、青春だなぁ」

俺とカイトのほのぼのとした空気をぶち壊してくれたのはもちろんジンさんだ。

逆さまになって枝に張り付いている。この人、本当に人間だろうか。

「いつから見てたんですか」
慌てる俺たちにジンさんがニヤニヤしながら返す。
「んー？　最初から」
「このくそオヤジが!!」
俺は被っていた猫を引っぺがし、地面に落ちている石をどんどん投げるが当のジンさんはガハハハとどこぞの悪役のように笑いながらヒョイヒョイとかわしていく。
「解読終わったみてーだし明日から修行な」
「は?!」
「タローに修行つけてやるって約束したからな」
「必要ないって言いましたよね?!」
「もう決めたし」
「待って下さい。流石にタローは死にますよ！」
「大丈夫だって！　根性だせば死なない」
また根性か。
根性だけでジンさんについていけるなら世の中ハンターが溢れかえっている。
だが俺は理解した。ジンさんが決めたことに後から何を言っても無駄だと。
諦めて溜息をつくと信じられないセリフが耳に届いた。

「んじゃ、カイトは夕飯とってこい。タローは薪集めと水汲みな」
「「あんた、鬼だ!!」」
俺とカイトの心が一つになった瞬間だった。

翌日からのジンさんの修行は死を確実に認識させた。
頭から何かの動物の血液をかけられそのまま文字通り放り投げられた……人食い虫の住む洞窟に。
体力強化だと、凶暴な魔獣の赤子を背に括り付けられ親の前に放り出した。
湖に連れていかれると真ん中まで泳げと言われ、しぶしぶ泳ぐと湖なのにサメが出てきた。いつからサメは淡水魚になったんだ。
死にかけてカイトに助けられると一人で出来なかった罰だと言われ、ジンさんを背中にのせて腕立て伏せをさせられる。
そして一通り修行と言う名のイジメが終わると、夕飯用のウサギ取りが待っている。
これが精神的に一番きつい。
屠殺用の斧を肩に担ぎ、もう何度目かわからない溜息をついた。
「今日もうさたんをぶち殺す作業が始まるお……」
「バカな事言ってないでとっとと行って来い」

ジンさんに背中を蹴られ嫌々森の中へと入る。
まずは大木によじ登って手頃なサイズの鼠やイノシシを探す。ウサギの釣り餌に使う為だ。
ちなみにウサギ以外の獲物を持って行っても無駄。ジンさんに追い返される。
俺の常識ではウサギは草食動物のはずだったんだが、何故かこの森では凶暴な肉食獣だ。しかも俺よりでかい。
その爪には毒があり一撃でもかすれば痺れてあの世が見える。真正面から向かっていくのは無謀の極みだ。なので瀕死の餌を木に括り付け、襲っている所を狙うのだ。
まあ、ジンさんやカイトだと真正面からスパーンですけどね。
今日は運よく餌が早く見つかり罠をセットしてまたもや木に登る。
枝の上でジッと気配を殺して待っているとウサギがのこのこやってきた。警戒しつつも血の匂いには逆らえないのかすぐに食べ始める。
餌に気を取られている隙に枝から飛び降り、ウサギの首めがけて斧を振り下ろす。
手のひらに鈍い感触が伝わり、首が地面に転がったのを確認すると素早く距離を取った。
「うわー、相変わらずグロイ」
死体がグロイのではない。そんなものはとっくに慣れた。

ウサギの体には無数のダニやら寄生虫やらが住んでいる。そいつらは宿主が死ぬと一斉に死体から飛び出し、次の宿主を探し始めるのだ。これはもう視覚への暴力に他ならない。

これを初めて見た時は吐いた上に、サナダムシもどきに皮膚を食い破られ寄生された。幸いカイトが近くにいたのですぐに取ってもらえたが……。

虫たちが完全に離れるのを待ってようやく血抜きして皮を剥ぎ、キャンプへ持って帰って3人分の肉を焼いて食って寝る。これがだいたいの1日の流れだ。

ジンさんに攫われておよそ2週間、師匠との文明的な生活とは雲泥の差で涙が零れそうになることがたくさんある。

食事はウサギの肉に塩を振って焼いた物だけだし、風呂に入れないせいで全身血と泥で薄汚れている。

食生活はともかく、水浴びくらいはしたいが近くの川には水辺に近づいた生物を無差別に襲うピラニアもどきがいるため難しい。

どうしても水浴びしたければ10km離れた泉にいくしかないが、ジンさんのシゴキが終わった後に10km往復マラソンなんて出来るわけもなく、水に濡らしたタオルで拭くだけだ。

あまりに辛くて師匠はまだかとか、早く帰りたいとか弱音を零すと、

「何だ、逃げるのか。弱虫小僧」
そうジンさんに煽られる。今はもう意地だけでここに残っている。
不味い肉を無理やり胃に流し込み、体を拭くともう体力の限界だ。
適当な木の根元に転がり寝る体勢に入る。布団なんて高尚な物はここには存在しない。
ふと、近くに目をやるとジンさんとカイトが元気に組み手をしている最中だった。
ジンさんは分かるがカイトよ……どこにそんなパワーがあるんだ。
俺以上のメニューをこなして、さらに毎日水浴びにいってるはずなのに。
これが原作キャラ補正か、チートかこの野郎。
これ以上あの2人を見ていると虚しくなるので空へと視線を移す。
師匠は今何をしているんだろうか、仕事は終わったんだろうか。
いつも俺を優しく見つめてくれる師匠の顔を思い出すと涙が出そうになる。
瞼を閉じ、こぼれそうになる涙をぬぐおうとしたその時、
「タロー、避けろ!!」
ジンさんに吹っ飛ばされたカイトが俺めがけて飛んできた。
避ける体力がなかった俺は衝撃をモロに喰らい、木の幹に叩きつけられた。

「スマン、大丈夫か?!」
流石のカイトはすぐさま起き上がり俺の頬を叩く。
口の中を切ったのか鉄の味が口内に広がった。血反吐を吐くのはこれで何度目だろうか。
大丈夫、そう言って立ち上がりたいのに手足がガクガク震え、力が欠片も入らない。
疑問に思って体をよく見ると薄い霧の様なものが全身から吹き上がっていた。
「やっべ、精孔が開いちまった!」
珍しく慌てたようなジンさんの声が聞こえた。
精孔?　じゃあこの溢れ出してる物がオーラなのか……ということは留めなければ死ぬ。
混乱する心を落ち着かせ必死に身体から力を抜く。
「タロー、よく聞け。俺の手の動きに全意識を向けるんだ。失敗したら死ぬから必ず成功させろ」
無茶ばかり言う。でもやるしかない。
目を閉じ横たわる俺の体にジンさんの手がゆっくりと血の巡りを辿る。
この2年、念を起こすために色々がんばってきたのだ。
ここで失敗するわけにはいかない。

師匠と共にやってきた瞑想の感覚を思い出しながらジンさんの手の動きに意識を向けた。
どれくらい時間がたっただろうか。
「よくやった、タロー」
笑うジンさんの顔。
その記憶を最後に俺は意識を閉じた。

次に目を覚ましたとき見たのは心配そうな師匠の顔だった。
「大丈夫ですか、タロー」
「……師匠」
「大馬鹿に無茶をさせられたようですね」
師匠の顔を見て俺は今まで張り詰めていた何かがプツンと音を立てて切れるのが分かった。
止めどなく涙が溢れてくる。拭う気力もない。
そんな俺を師匠は始めて会ったあの日のように何も言わずに抱きしめてくれた。
「いきなり精孔が開いてビックリしたでしょうね」
「師匠、精孔って？」

「それについての勉強は明日にしましょう。タローは1週間近く寝込んでいたのですよ」
「1週間も……」
無理やり起こされたからといってそこまでかかるものなのか。ゴンは一瞬で物にしたというのに……。
体力もない、念の才能もないとかマジで泣ける。
「今はゆっくり眠りなさい。大馬鹿者はタローの代わりに殴って起きましたからね」
師匠に頭をなでられながらうつらうつらと考える。
ジンさんを殴るって師匠そんなに強かったのか。
あれか普段はニコニコ優しい人が切れると怖いとかそういう感じだろうか。
色々聞きたい事はたくさんあるが師匠の手の温もりが眠気を誘う。
「おやすみなさい、師匠」
後はもう起きてから……。

穏やかな寝息が聞こえ安堵の溜息が漏れた。
「全く、心配させて……」
寝汗で張り付いた前髪をそっとかきあげる。

仕事が終わり迎えに行ったリーシャンが見たのはオーラが枯渇寸前のタローの姿だった。

成功したぜ。そう偉そうにふんぞり返るジンを殴り飛ばし、慌てて家まで連れ帰って治療した。

ジンのバカは古代文字の翻訳を手伝わせるだけだと言っていたし、弱いタローに無茶はさせないと信じていた。なのにタローの全身はボロボロだった。

「半殺し……いや8割ぐらいにしましょうか」

頭の中でジン襲撃計画を立てていたリーシャンの円によく知った気配が触れた。

こんなに主張しまくる尊大なオーラの持ち主は一人しかいない。

探す手間が省けた。わざわざ来たということは多少は悪いと思っているのだろうか。だとしても手加減する気はないが。

ジンがいるダイニングに向かいながら本を具現化させ、廊下の隠し扉から愛用品のナイフを取り出して次々と宙に浮かべる。

「さて、言い訳があるなら聞きましょうか」

「やりたかったからやった。そんだけだ」

ダイニングの扉を開け臨戦態勢を取るリーシャンの問いかけにジンの答えは飄々としたものだった。ソファにだらしなく寝転がり警戒する素振りさえ見せない。

「カイト君には悪いですが、貴方は一度死ぬべきですね」
　強大なオーラを練りナイフへと込めた。宙に浮かべたナイフは１００を超える。流石のジンもこの距離と数なら避けきれまい。
　そう確信したリーシャンが攻撃へと転じる刹那、ジンがニヤリと笑った。
「いいのか？　タローが起きてきたぜ」
　ハッとして閉じていた円を広げ気配を探る。タローはベットで眠ったままだ。
「……ジンッ！」
「よっぽど大事みてーだな、あの坊主が」
「試したのですか!?」
「誰も懐に入れない妖怪が弟子を取ったんだ。そりゃ気になるさ」
「それが原因ですか……」
　完全に気が削がれ力が抜けた。本を消しナイフを隅に置いて、秘蔵の酒瓶を取り出す。
「お、いいな」
「あげませんよ」
「けちくせーこと言うな。ほら、こっち座れ」
　手招きされるまま向かいのソファに腰を降し、酒瓶を傾けて一気に煽る。久々に感じ

るアルコールが喉を焼く感覚に沸騰した感情が冷えていった。もう一口流し込むと瓶をジンへ放り投げる。

度数の高い酒は苦手なのかチビチビ舐めながらジンが口を開いた。

「リーシャンの弟子っつーのもあるが……あいつ、変だろ？　天然かと思ったが違うみたいだしな」

「使えるかどうか試す為にあんな真似を？」

「ああ、そうだ。使えなかったみてーだが、知ってはいたな。あれは」

「そう思った根拠を聞いても？」

リーシャンがタローとの生活で念の事を話した覚えも匂わした覚えもない。念に関する本を所持しているが鍵付きの本棚に厳重に仕舞われている。タローがこじ開けて読んだ形跡もないし、そんな勝手なマネをするような子じゃない。

疑問渦巻くリーシャンにどこか自慢げにタローの精孔を開いた時の様子をジンが語る。

全てを聞き終わった途端、リーシャンの拳がジンの顎へとめり込んだ。

「すいません。つい、カッとなって」

「うそつけ」

痛む顎を摩りながらジンは話しを続けた。

「無理やり起こした時、精孔が開いたって言っただけでタローは体の力を抜いたんだ。知ってる以外考えられねーだろ」
「確かに……」
「それにな、あいつカイトを知ってたんだ」
「意味がわかりませんよ？」
「カイトに初めて会った時のあいつの目に恐怖がなかった。弱虫なのにな」
　タローの様なタイプが初対面の人間に会うと必ずその瞳に恐怖が映る。自分が弱いと知っているから害があるかもしれないと脅えが混じる……そうジンは語った。
「俺には子猫みたいに毛を逆立てたくせに、盛大にゴロゴロ懐いてたぜ」
「なるほど……」
「念が使えないってことは予知系の能力じゃない。なのに憧れを持つほどカイトを知っている。自慢じゃないがカイトも結構箱入りで育てたんだぜ？　拾ってから街に降りたのは数える程だ。カイトと同じスラム育ちかとも考えたが、手足が柔らかすぎる。なあ、リーシャン。あいつは一体何なんだ」
「僕も知りませんよ」
「おい、はぐらかすな」
「本当に知らないんですよ。タローは自分の事を何も話しませんから」

「聞いとけよ！」
「あの子が話す気になるまで待つと約束しました」
「うがーーーーっ！　気になるだろーが!!」
「うるさいですよ。自分で聞けばいいでしょう？」
「そんなカッコの悪いマネができるかーー!!」
暴れだしたジンを転がし、煩い口を踏みつけるとやっと静かになった。奪い返した酒瓶を傾け人心地をつく。
結局の所、ジンの興味本位か……そう、今回の騒動をまとめた。
バカな男だ。タローがタローである限り、どんな情報を知ってようが無害である事に変わりはないのに。
この様子ではまたいらぬちょっかいをかけてくるに違いない。
逃げれるように体力と脚力に重点をいれるか。そう決めたリーシャンは修行のメニューを作り直すべく、紙とペンを手に取った。

第五話　【原作前】

「おはよう、タロー。体調はどうですか？」
　起きてダイニングへ向かうとすでに師匠が朝食の準備を整えて待っていた。
「おはようございます、師匠。とってもいいです」
「それは良かった。では朝食が終わったらタローに起きた現象の説明をしましょう」
「わかりました」
　今日の朝食は純ジャポン風。白いご飯に筍の甘煮、塩鮭にダシ巻き卵とこれでもかと俺の好物が並んでいる。味噌汁をすすり、ご飯を口に入れると幸せが広がった。
　これだよ、人間の食い物って本来こういう物だ。
　寄生虫だらけのウサギの肉なんて……カイトにもわけてやりたい。まだアレ食ってんだろうな。
　食事が終わり片づけがすむと開口一番、師匠が切り出した。
「一言でいうなら念といいます」
「念……？」
「タローの体の中には体液とは別にオーラと呼ばれる生きていく為の源とされる水があ

ります」
「水ですか……」
えらく大胆な説明だ。
お水ときたか。
「そうです誰しもの体にもこの水があり、大小大きさは人によって違いますが体の中にこの水が湧き出るバケツが存在し、フタがしてあります。このフタが精孔と呼ばれています。
普通はバケツのフタが閉まっていますが、バケツからはいつも水が湧きでていますので少しづつですが体の外へ出てきてしまいます。頭のてっぺんから足元へと……この現象を垂れ流しといいます」

用意されていた大きな紙に分かりやすい絵と文字で解説される。
「このバケツ実は底が不安定になっていて、他人の垂れ流している状態以外の水が当たってしまうと、簡単に倒れてフタが開き中に入っている水が体中から溢れ出て行ってしまいます……この現象を精孔が開くといいます。この現象はとても危険で、水は命の源なのにバケツは倒れてしまいどんどんあふれ出てきています。この水がバケツの中から全て出てしまうと人は死んでしまいます。タローはどうすればいいと思いますか

？」
「水を戻せばいい？」
「そうですね。体から離れてしまうととても危険です。溢れていく水を体の周りに集めバリアの様な薄い膜を作り、それ以上水が外に出ないようにします……これを纏と言います」
「俺はバリアはちゃんと張れているんでしょうか？」
「まだまだいびつですが馬鹿のせいで混乱しながらやり遂げたと考えれば立派な物です　その纏の流れを良くしていきましょう」
「今日は纏を練習するんでしょうか」
「その通りです。纏は歩くことに良く似ています、歩き方を一度覚えれば何も考えなくても歩けるようになります」
「倒れてしまったバケツは２度と戻りませんが、フタを閉め直すことはできます。水が１滴も漏れないようにギュっと閉めますと絶、バケツから湧き出ている水の源の穴を一気に広げて、通常以上量の水を体の外へ出す事を練と言います。ここまでは理解できましたか？」
「はい」
「この水の形を変えたり体の外へ出して操ったり、人によって様々現象は違いますがこ

れを発と呼びます。いわゆる必殺技です　これは攻撃という手段だけには留まらず、人を癒したりはたまた遠くの場所へ行ったりする事もできます。水を操る技術の事を念といい操る人の事を念能力者と言います　纏・絶・練・発　この４つを合わせて念の基本四大行といいます」

「四大行に必殺技ですか……」

やっぱり師匠の教え方は分かりやすい。

「タローも男の子ですから必殺技には惹かれますか？」

「ものすごく!!」

「実際見せた方が早いでしょう　これが僕の発です」

少し離れた所に立つと師匠はビックリしないで下さいねといいながら、巨大な真っ白い本を出現させた。

「デカ!!」

高さだけでも俺の目線くらいある。

なんか凄そうな念だ。

さすがというかやっぱり本なんですね。

師匠は具現化した本に体重を乗せつつ、更に説明を続けた。

「発はむやみやたらに作る物ではありません。いきなり出来てしまう時もありますが、

一生付き合っていくことになりますし駄目だったら作り直すということもできません」
「師匠はその本を作るのにどれだけかけたのですか？」
「２０年ほどです」
「……ッ」
　思わず絶句する
　２０年って……。
「変な顔になってますよ」
「変な顔にもなりますって！」
「アハハハ。僕は色々な念能力者を長年見てきましたが念を覚えて1年以内に作った発はほぼ失敗します。ですからタローも1年は発を作るのは禁止です」
「……わかりました」
　たった1年、されど1年。能力づくりを楽しみにしていただけに言葉に不満が籠った。
「焦ってはいけません。タローの人生は長いのですから」
「はい」
「タローには僕がいます　完璧な師匠という訳ではありませんが年を食っているのでちょっとしたずるも知っています。気長にやりましょう」

「了解です!!」
　ビシっと手をまっすぐ上に上げて元気良く返事をする
「それでは纏から始めましょう」
　そう言って渡されたのは銀ぶちの眼鏡。かけるようにうながされ装着してみるとガラリと景色が変わった。
「おおっ」
「僕とタローの周りにもやが見えるでしょう?」
「はい。これがオーラなんですね」
　同じオーラと言っても印象は全く違う。
　師匠のオーラは肌にピタリと薄い膜を張っているのに対し、俺のはねぐせのようにあっちこっちに跳ねまくりひと時もじっとしていない。今も形を変え続けている。
「タローのオーラが凸凹しているのは分かりますか?」
　黙って首を縦に振る。
「タローは上手くオーラを循環させることができず、オーラが体の外へ出て行こうとする力に負けてしまっているせいです」
「だから俺の纏がいびつだといったんですね」
「その通りです。ベットに寝て体の力を抜き、目を閉じなさい」

俺が楽な体勢を作るとぬるま湯に使ったような感触が全身を包んだ。
「今感じている感触は僕のオーラです。一点だけ得に存在を感じる部分があるのがわかりますか？」
集中すると左の指先の辺りに感じる事ができた。
「左の指先でしょうか？」
「その通りです。ではゆっくりその部分を移動していきますのでタローはその感触を意識で追っていって下さい」
師匠のオーラは心臓からつま先、そして頭頂部へと血の巡りと重なるように動いていく。
しかし、師匠のオーラが気持ちよすぎてついうとうとしそうになる。
「タロー、寝たらお仕置きですよ」
「ネ……ネテマセンヨ」
ちょっと危なかったけど……。
師匠は有言実行なので寝たら確実に恐ろしい目にあわされそうだ。
焦った心を落ち着かせ、ゆっくりと師匠のオーラを感じる作業に戻った。

お昼まで纏の修行は続いた。

本当に危険な修行だった。主に眠気的な意味で。何度も意識が飛びそうになったので、皮膚に爪を立てて耐え忍んだ。

昼食後、鏡を見てみると凸凹部分がだいぶマシになっていた。

こんなにすぐ効果が表れるとは思わず、正直ビックリしている。

「次は絶と身体トレーニングです」

「さすがに2つ同時は……というかすぐには出来そうにないですよ」

「普通は無理ですね。でもこの腕輪があれば問題ありません」

はめてみなさいといわれ、先ほどのメガネと同じようにつけると自分のオーラがすっと消えた。

「え？」

「それが絶です」

「その腕輪やメガネは念具と呼ばれる道具で色々な種類があります。念がこめられた道具だから念具、メガネはオーラを見えるようにする効果があり、腕輪は強制的に絶状態となるものです」

「なるほど、だからこんなに簡単に……」

「念は体で覚えていくものです。いくら頭に知識があろうとも体が覚えなければ決してマスターはできません」

体力や傷の回復も早くなるって読んだし絶は大切だろう。
しかし念で絶が使えるようになったからか、今までの修行内容より一段と厳しいメニューが用意されていた。
ジンさんの修行内容と違い命の危険はないが、１セットの回数はいきなり１００回から３倍の３００回に増やされ、消化スピードも上げるよう指示された。
少しでも余裕ができたと判断されれば容赦なく回数が上乗せされ、文字通り悲鳴を上げながら取り組むハメになった。
そして新たに体術が組み込まれた。
体術といっても最初は反射神経の訓練といった感じで、師匠が操るロープを右へ左へと避けていく。
これも慣れてくれれば本数を増やされ、半年が経った今では総数は１０本になっていた。
ここまで増えるといくら広いとはいえ、逃げ場はあまりにも少ない。
必死に隙間をかいくぐる。
「ぐっ……！」
死角から襲ったロープが後頭部を直撃し、前方につんのめった。その隙に左右から襲われ思わず上空に飛び上る。

「悪手ですね」
師匠の言葉と共に雪崩のようにロープが前後左右から向かってくる。逃げ道は上か下。
しかし、宙に浮いているせいで方向転換ができず床へ叩きつけられた。
肺が圧迫され呼吸が阻害される。だが師匠の手はゆるまない。
ダン、ダンとリズミカルな音を響かせて威嚇をしながらロープが近づいてくる。
早く立て。そう言っているのだ。
気合いを振り絞って両手をつき身体を起こす……が、わずかに間に合わず身体を弾き飛ばされ壁に激突した。
残っていた体力の全てを削りとられ床に倒れこんだ。
「ここまで、ですね」
「ハア、ハア……ありが……とう……ございましたー」
ようやく発せられた終了の声。
心臓が早鐘を打ち、額からは滝のように汗が流れ落ちた。
念を覚えてからの修行は正にスパルタだ。いや、それまでのが楽すぎたんだろうが。
体力を使い切って動けない俺を師匠が抱えて風呂に放り込む。
ミミズのように這いつくばりながら服を脱ぎ冷たいシャワーを浴びるとだんたん四

肢に力が戻ってきた。
ざっと体と頭を洗い湯船につかる。
このまま湯船に懐いていたい気持ちで一杯だが、修行の合間の風呂は１０分と決められている。
時間を僅かでも過ぎればノルマが倍増されるのだ。
師匠は有言実行。
以前、つい居眠りをしてしまった時は地獄だった。何度謝っても許してもらえず、泣く泣くノルマをこなした。ちなみに終わったのは夜中の４時だ。

風呂から上がると座学の授業。
絶の効果は素晴らしく、風呂から上がる頃には授業を真面目に聞くことができるくらいまで回復している。
念ってマジチートッス。
朝は纏てん、昼から夕食までを絶と身体トレーニング。夕食後には座学。そして寝る前にまた纏てんと半年ほど続けた今では腕輪を取った状態でも師匠に完璧といわれるような纏てんと絶が出来るようになった。
褒められた時はうれしくて舞い上がったけれど、よくよく考えればかなり習得スピー

ドが遅い事に後から気がついた。

ゴンとキルアって確か1日でクリアしてなかったけ……？

チートの1日が俺の半年か。少し目頭が熱くなった。

第六話　【原作前】

「綺麗だなあ……」

どこまでも続く青い海原、サンサンと降りそそぐ太陽の光が肌を焼く。波は穏やかにさざめき、鼻をうつ塩の匂いは故郷のそれと全く変わりなく郷愁を誘った。

船尾に腰をかけ水面に足先を垂らす。暖かな地上の空気とは違ってヒンヤリと冷たい。

遠くから水しぶきの音が聞こえ目をやるとイルカだろうか、大型の海洋生物が水中から飛び上り大きなアーチを作っていた。跳ねた飛沫が光に反射して小さな虹が出来る。

「まだ着替えてなかったのですか」

振り返るとウェットスーツを身にまとった師匠が呆れたように俺を見下ろしていた。

「師匠……本当に俺も行くんですか？」

「最初からそう言っていたでしょう」

「……本当の本当に？」

「怖がる理由は理解できますが、いい加減諦めなさい」

「うう……」

「タローなら出来ますよ」
出来なきゃ死にますもんね。つい漏れそうになった悪態を飲み込み、のろのろと立ち上がる。
いつもなら嬉しい励ましの言葉も今の俺には何の慰めにもならない。
更衣室に向かいながら着いてこなければよかったと後悔が頭をもたげた。
発端は新聞記事。

――――――未知の遺跡が発見された。

その記事がでかでかと一面を飾ったのは2週間ほど前だ。
興味を引かれ読み進めるが大した情報は載っていなかった。
位置はパドキア領内らしいが詳しいことは不明。唯一、オルレア教授を筆頭にドリームチームが組まれたことが軍部のリークで判明したこと位だ。
追加情報が待たれる。そう締めくくられていた。
「師匠、オルレア教授って知ってます?」
「言語学の重鎮ですよ……なるほど、これはやっかいですね」
「やっかい?」

記事には遺跡の詳細について何も触れられていないのに、何故そんなことがわかるのだろう。

疑問が顔に出ていたらしく、師匠は続ける。

「軍部のリークとあるでしょう？　通常、遺跡調査に軍の協力など必要ありません。これは暗号解析班が組まれている証拠です」

「暗号？」

「ええ、解読法が不明な古代文字によく使われる手法です。恐らく形態すらわかっていないのでしょう。きっかけが掴めなければ１００年はかかりますね」

「そんなに……」

「電話線を抜いておきなさい。僕に飛び火したら面倒です」

乾いた笑いが漏れた。

師匠曰く、古代文字を学んだのは読めない本を読むためであって、古代文字それ自体には何の興味もないらしい。

解読方法の確立などやっかい極まる。それが本音のようだ。

「そんなことより、今日から本格的に応用を仕込みます。しっかりついてきなさい」

「はい！」

この話題はここで終わり、俺も師匠も日々修行に忙しく、記事のことはすっかり忘れ

ていた。

そう、ジンさんが再びやってくるまでは……。

部屋一面にガラス片が散らばる。ジンさんはあろうことか窓ガラスを蹴破って侵入してきたのだ。

「今日はリーシャンもいるな」

「……ジン、来るなら玄関から入りなさい」

「冗談言うな。死んじまうだろ」

師匠とジンさんのオーラが膨れ上がり、一気にぶつかり合った。

目にも止まらぬ拳の応酬。趣味のいい調度品が揃えられたダイニングは戦場と化し、壁が抉れ破片が舞う。

慌てて隅へ避難したが被害は避けられず、次々と襲ってくる残骸を必死にかわす。

「師匠！　ジンさん！　外でやって下さい!!」

叫んだ途端、うるさいと言わんばかりにジンさんがキャビネットだった物を殴り飛ばした。

ご丁寧に周まで施して……相変わらず無茶苦茶な人である。

避けるのは無理だな。そう判断し、足にオーラを集める。

俺は殴るのが苦手だ。どれだけ力を込めても標的に到達する頃には勢いが弱まって

しまう。
精神的な物だと師匠は言ったけれどすぐに治るはずもなく、代わりに足技を仕込まれた。
教え通り、軸足でしっかり地を掴み上体を捻って回す。そして踵の精孔を開き、圧縮したオーラを放出し更に加速させて叩き込む。
「やった……！」
あっけなく砕け散ったキャビネットに思わずガッツポーズがでた。
今までこの技を試す相手は師匠だけで、上手くなったと言われてもいまいち実感を持てずにいたのだ。
俺ってやれば出来る子なんだ……内心、狂喜乱舞していると死角から何かが近づく気配がした。
またジンさんか。振り向きざまに同じ要領で繰り出した蹴りは宙を切った。
「おいおい、危ないな」
「カイト!?　何でこんなとこにいんの？」
「何でって……俺はジンさんの弟子だぞ」
「あ、そっか」
忘れていたわけでは決してないが、以前はジンさん一人だったので今回もそうだと思

い込んでいた。
　近況を知らせるメールは交わしていたが、顔を合わせるのはあの時以来だ。
「久しぶり。元気だった？」
「ああ、タローも元気そうだな」
「うん。所でさ、アレ止めてきてよ」
「無茶言うな」
「ですよねー……」
　喋っている間にもどんどんダイニングは廃墟へと変貌していく。
「俺の部屋来ない？　もうほっとくしかないよ、アレ」
「だな」
　頷いたカイトを連れてベランダから自室に向かう。
「ジャポンが好きなのか」
「え？」
「これ、畳だろ？」
「そうだね……」
　ジャポンじゃなくて日本だよ。そう言いたい気持ちを押し殺す。
　すっかりこちらに馴染んだ俺だけど、飛ばされた当初は帰りたくて仕方がなかった。

当り前だ。住み慣れた故郷なのだから。
探せばあるのかもしれない。帰る方法が。
でも帰ってどうする？　こんな若返った姿で。
両親はきっと受け入れてくれる。でも、仕事は？　生活は？　家族におんぶにだっこ、今と何も変わらない。いや、問題はこちらより山積みだろう。
7年……7年たてば戸籍上、向こうの俺は死ぬ。
あまり多くはないけれど貯金は両親の手に渡るだろう。それで許してもらうしかない。
黙り込んだ俺の肩をカイトが揺すった。
「気分でも悪いのか？」
「あ……いや、ごめん。考え事してた」
無理やり笑顔を貼り付け、話題を変える。
「……で、師匠に何の用なの？」
「ジンさんがまた遺跡を発見してな。調査の為にチームを組んだはいいが、翻訳担当が匙を投げた」
脳裏に先日読んだ新聞記事が浮かんだ。
「もしかしてパドキアの遺跡？」

「何だ、知ってるのか」
「新聞で読んだ。師匠が１００年かかるって言ってたよ」
「マートさんがやるなら1年だって聞いたが……」
「マジっすか」
「ああ、マジだ」
流石にそれは過大評価じゃないか？　そう思ったが外で仕事をしている師匠を全く知らないので否定できない。
「タローも来いよ。今度のはスケールが違う。真っ青な塔が何本もこう……――」
身振り手振りで遺跡の説明を始めたカイトに心が動いた。
「師匠が行くなら行ってみたいな」
「大丈夫だ。ジンさんが誘ってマートさんが来なかったことなんてないからな」
「へー……でもさ、アレって誘ってるっていうの？」
「毎回アレだぞ？」
何それ怖い。

しばらくして話し合いは終わったらしく、静かになったダイニングを訪れると予想通りというか、予想より凄まじいというか。

壁はコンクリートが全て失われ鉄骨がむき出しになっている。床も言わずもがなだ。
ジンさんも師匠も傷だらけで青アザがあちこちにある。
ていうか、ジンさん。その右腕、折れてやしませんか……。
カイトの話した通り結局受けることになったのか、争いなどなかったかのようにうち合わせを始めていた。
「シャトー夫人、コバルト少将。この2人には必ずオファーを入れて下さい」
「シャトーのばーちゃんはともかく、コバルトはロカリオの軍人じゃねーか」
「根回しはこちらでします」
「ならいいけどよ……。いつ来れる？」
「1か月ってとこですね」
「おせーよ」
「2国に話を通すのですからそれ位は必要です」
「あーもう、めんどくせえ。パドキア軍人おっぱらうから、もうちょい早く来い」
「なら、1週間ですね」
「決まりだな。カイト、戻るぞ」
「はい」
嵐のようにやってきたジンさんは嵐のように去って行った。

そして場面は冒頭に戻る。

よくよく考えればヒントはあったのだ。カイトが言っていたじゃないか……青い塔が何本も立っていると。

そんな目立つ遺跡が今まで発見されなかったのには深い訳があった。そう、文字通り深い訳が。

自分のバカさ加減に呆れながら師匠と結びつけられた命綱をじっと見つめる。

「水深３００ｍを超えたら全力で堅を展開しなさい。持たないと判断したらロープを２度続けて引っ張ること。いいですね？」

「……はい」

「３回深呼吸をしなさい。３度目でいきますよ」

「了解です」

特別製のゴーグルを装着し、呼吸を繰り返す。最後に大きく吸い込んで肺に空気を貯めこむと同時に甲板を蹴る。

事前に何度か練習させられたおかげか、スムーズに着水できた。力強くフィンで水を蹴り底へと潜っていく。

腕につけた深度計を見ながら３０ｍごとに耳抜きを行い、鼓膜を守る。

１５０ｍを過ぎると水圧が強くなり始め、２８０ｍを超えたところで耐え切れなくなって師匠の指示よりは早いが堅を展開させると、あれほどきつかった圧迫が消えてなくなった。

念ってやっぱチートだ。

５００ｍを超えるとそこはもう暗闇の世界。深海魚が放つ僅かな光が見えるくらいで師匠と繋がったロープが無ければ上下すらわからない。

――まだか、まだつかないのか。

水深８００ｍ。

どんどん少なくなっていくオーラに焦りが生まれた。酸素を求めて心臓がバクバクがなり立てる。

水深９００ｍ。深度計にヒビが入ってゴミへと変わった。

もう無理、限界だ。そう思いロープを引こうとした瞬間、ぼんやりと光が見えた。

夏の虫のように懸命に光を目指して水をかく。

近づけば近づくほど光は強くなり、やがて全貌が現れた。

海底に静かに眠る半球状の遺跡。

雲一つない青空のような色でサーチライトに照らされキラキラと輝いている。

まるで宝石みたいだ……そんな陳腐なセリフしか出てこない自分が嫌になるほどの

美しさだった。
素材は岩だろうか、それとも金属か。不思議に思って触れてみると指がずぶりと飲み込まれた。
――え……？
慌てて引き抜こうとするが後ろからドンと押され腕までめり込んだ。
振り返ると遺跡よりも輝いている師匠の笑顔があった。
――ちょっ……まっ！
慌てるあまり肺に溜まった空気を吐き出してしまう。反射的に吸い込むがここは海。当然のごとく海水が肺へ流れ込む。
苦しい所ではない。死ぬ、死んでしまう。
理性を失って暴れまわる俺を師匠は更に強く押した。
壁を通り抜けるとそこには海水ではなく、空気で満たされた空間だった。
「グハッ……ガフッ……ゲ、ゴッ！」
大地に爪を立て肺に溜まった水を吐き出す。
生理的な涙が頬を伝い、鼻水が止まらない。
「ひでえ顔だな」
「ゴボッ……！　ジンざん……？」

「ほら、これ使え」
　渡されたタオルで顔を拭い、鼻をかむ。
　いつの間にか隣に来ていた師匠が背中を優しくさすってくれた。
「全く、情けないですね」
「師匠のせいじゃないですか!!」
「さて、記憶にありませんね」
「ひでえ!!　だいたい師匠はいつもいつも――」
　師匠は基本的には優しい。だが、変な所で悪戯心を出すのだ。やってる師匠は楽しいかもしれないが、やられる俺はたまったものではない。
　恨みつらみその他もろもろ、日頃の鬱憤も合わせてぶつけるが師匠はどこ吹く風、涼しい顔をしている。
「まあ、そんくらいにしとけ」
「ジンさんは黙ってて下さい。これは師弟の問題です」
「はいはい、わかった、わかった。後にしろ」
「ちょっ！　引っ張んないで下さいよ」
　首根っこを掴まれ、いつぞやのようにずるずる引っ張られる。
　動物のような扱いに唇が尖った。

諦めてされるがまま運ばれていくと砂地に四角い建物が２０棟ほど建っていた。
カイトに聞いてた物と随分違う状況に首を傾げる。
「あれが遺跡ですか？」
「お前はバカか。んなわけねーだろ」
疑問を口に出すと叩かれた。理不尽だ。
「タロー、円を張りなさい」
「あ、はい」
素直に展開すると地面の下に大きな空洞があった。
「地下があるんですか?!」
「ああ、後で見せてやるよ。んであれは宿舎だ」
連れていかれた宿舎はまるで小さな町のようだった。老若男女、様々な人種が行きかい、各所に置かれたベンチや椅子に座って論戦を繰り広げている。
路地の奥には小さな商店まで用意されていた。開いた口が塞がらない。
「ここって海の底の遺跡ですよね？」
「そうですよ、頑張って泳いで来たじゃないですか」
「何でこんなに人がいるんですか？」
「この規模になるとあらゆる学者や発掘スタッフが集められますからね。流石の僕もこ

こまで多いのは初めてですが」
答えになってるような、なってないような……。
「1年で謎を解くにはこれくらいやらないとな」
「また無茶を言って」
「俺たちなら出来るさ」
呆気にとられすぎて、軽口を言い合う師匠たちに口を挟む余裕はもうなかった。

気付いたら割り当てられた宿舎の部屋でサンドイッチを齧っていた。
何を言ってるのかわからないと思うが、俺も全くもってわからない。
混乱しつつも熱いシャワーを浴びて塩を洗い流し、布団にもぐる。
もう、いいや。明日になったら考えよう。
思考を放棄して睡魔に身をゆだねた。

■

翌朝、顔合わせがあると師匠に着いていった先にあったのは大きな講堂だった。
もう驚くだけ損である。そんな達観した気持ちで席につく。

「ジン・フリークスだ。遺跡ハンターをやってる。こいつは弟子のカイトだ」
「古書ハンターのリーシャン・マートです。この子は僕の弟子のタローです」
「シャトー・メルバと申します。絵画鑑定が専門ですわ」
「コバルト・ブルーだ。暗号解析が専門だ。これは部下のウイスタリア」
全員そろった所で、ジンさんから次々に立ち上がって自己紹介をしていく。
最前列に座っているのが呼ばれたメインの人で、後ろに座っているのが弟子か付き人。
紹介される人とされない人がいるので気になってそっと師匠に小声で確認すると、未熟なうちは紹介しないのが暗黙の了解になっているそうだ。
俺も未熟だと反論すると、
「翻訳者としては未熟ですが、ハンターの弟子としてならそこそこですよ。使えますしね」
そう返され嬉しくなった。
ハンターの直弟子になるとこうやって仕事に連れまわされ、顔を売るのが一般的なんだそうだ。
そうやって師匠の人脈を受け取りながら、独自のルートを構築していくらしい。
「タローも頑張りなさい」

今回の宿題です。そう言われ頭を抱えた。
人脈作り……名刺でも作って渡せばいいのだろうか。
そんなリーマン的思考に囚われているとガタガタと椅子の音が広い講堂内に響いた。
ボーっとしているうちに顔合わせが終わったらしい。
辺りを見回して師匠を探すと大勢に取り囲まれていた。これでは近づけない。まるで要塞だ。
「師匠ってば人気者……」
「そりゃそうだろ。滅多にこんな場には出てこない人だぞ」
「ふうん、その割にはジンさんは囲まれてないよね」
「ジンさんは呼ばれるんじゃなくて呼ぶ立場だからな」
「なるほど」
どうせ呼びつけたって来ないっていう理由もありそうだけど。
「で、カイトは何で俺のとこに？」
「俺たちは雑用係に任命されてるからな」
「……聞いてないんだけど」
「今言っただろ？」
何その論理。破たんしてるよ。

■

「おーーーーーもーーーーーいーーーーー!!」
「うるせえぞ」
「こんなの軽々運べるカイトがおかしいんだよ!」
「俺は普通だ」
ちょっと普通の意味を辞書で引いてこい。
背負ったタンクの重量は約１０ｔ。俺たちの任務はこのタンクを海上にある船へ運ぶことだ。
無理だと抵抗してみたのだが無駄だった。
このパターン何度目だよ、もう疲れたよ……パトラッシュ。
カイト曰く、海中に入れば浮力が働くので重さは大分マシになるらしいがあまり慰めにはならない。
だって、中身はあれだし。
そう、ここには沢山の人間がいる。人間がいる以上、食べる物を食べ、出す物を出すのだ。

つまりあれだ。あれ。バイオ処理されているとはいえ気分のいい物ではない。
足を引きずりながらようやく壁に到着した所でハタと思い立った。
「そういや、どうやってこれを船に上げるの？」
クレーンでも使うのだろうか。
「ああ、それは簡単だ。まず水面に出たら船の位置を確認する」
当然だな。泳いでいるうちに海流で流されるかもしれないし。
頷きながら続きを促す。
「船の近くまで泳いだら１００ｍくらいまた潜る」
「え？」
「んで、オーラを一気に練って空に飛び上って甲板に着地する」
な、簡単だろ？　そう爽やかに笑うカイトを無言でぶん殴った。
「何で殴るんだ！」
「世の中の理不尽につい腹が立って」
「意味わかんねーぞ！」
「そりゃカイトにはわかんないさ……」
まあ、ここでカイトを責めても無駄だ。それはわかっている。
でもこの憤りをぶつけずにはいられなかった。

きっと俺は悪くない……はず。たぶん、きっと。

第七話　【原作前】

パドキア共和国西海岸に位置する港街。
建国当時から海の玄関口として利用されてきたこの街は、近代の発展に伴い鉄道や空港が近隣に整備され、今では世界有数の貿易港として知られていた。
埠頭には国内各所から運ばれてきたコンテナがうず高く積まれ、岸壁に設置されたクレーンが忙しなく荷を運んでいる。
停泊している幾多の貨物船。その内の一つを預かるこの道４０年のベテラン、船員から親父と親しげに呼ばれる船長は、会社から回されてきた書類を前に途方に暮れていた。
「親父、どうしました？」
心配になった航海士が問いかけると、船長は無言で持っていた書類を渡す。
出向前に必ず渡される運行計画書。そのページをめくる航海士の眉根が寄った。
通常ならば国名が記されるべき場所にはカンマで区切られた数字が並んでいる。
「座標……？」
「ああ、そこに持ってけだとさ」

大きな海図を広げ指示された場所を指で追う。
「海のど真ん中じゃないですか！」
大声を張り上げる航海士に船長は淡々と返事を返す。
「わかってる」
「何かの間違いじゃ？　大至急確認を……」
「もうやった。上は間違えてないの一点張りだ」
「どうやって荷卸しするんです？」
「知らん。受取人がやるそうだ」
「……裏の仕事はごめんですよ」
コンテナの重量は一番軽い物で２ｔ、荷卸しにはトラックかクレーンが必須だ。海上で荷を移すなど非効率だし、意味もない。そんなマネをするなら最初から相手の船がこの港までくればいい話だ。
出来ない理由は一つしか思いつかない。だが、船長は首を振って否定した。
「荷は税関の検査を通ってる」
「じゃあ……」
「わからん。だが行けというなら行くしかない」
船長と言っても海運会社に雇われる身だ。おかしな依頼だからといって拒否できる

立場ではない。
「エンジンに火を入れろ。さっさと済ませて戻るぞ」
「了解」
肩をすくめて航海士が持ち場に戻ると船長はじっと前を見据えた。
巨大なコンテナと乗組員の不安を乗せ、貨物船は大海原へ滑り出していった。

翌朝、定刻通りに到着した貨物船を待っていたのは船ではなく、波間に漂う2人の少年だった。
すわ、遭難者かとにわかに甲板が慌しくなり、浮き輪のついたロープが投げられ暖かな毛布が何枚も用意された。
浮き輪を手繰り寄せた黒髪の少年は引き上げる間もなく、するすると器用にロープを伝い甲板へ上がった。
大丈夫か？　怪我はないのか？　そう問いかける乗組員に笑顔を返しながら黒髪の少年はスウェットスーツの隙間からビニールに包まれた書類を取り出した。
「荷物を受け取りに来ました」
「荷物？」
「はい、この船で合ってますよね？」

差し出された書類を確認する。
「お前が受取人……?!　ちょっと待て。船はどこだ？　難破でもしたのか?!」
「船？　えっと、言っている意味がよく……荷物はこのまま持っていくつもりですけど」
「船ごと持っていく気か！」
運べと言われたのはコンテナだけだ、船は渡さん。そう荒い息を吐く船長に少年は困ったように首を傾げた。
「あの、俺たちだけで運びますから船は必要ないです」
「は？」
「だから、俺たちだけで運ぶんです」
「いや、無理だろ」
「問題ないです。カイト！　ワイヤー投げて」
頑丈そうなワイヤーを受け取った黒髪の少年はコンテナのフックにワイヤー引っ掛け、軽々と持ち上げた。
「いっくよー」
「いいぞー」
そんな気の抜けそうな掛け声と共にコンテナを海へ放り投げた。
「危ねえ!!」

慌てて縁から覗き込むと、カイトと呼ばれた少年は片手でそっと受け止め、海中へ沈めていく。
「大丈夫ですよ。彼、頑丈なんで」
そういう問題じゃないだろ。心の中で突っ込みをいれた船長と乗組員を尻目にコンテナは次々投げられ海に消える。
人外の域にある怪力、もしやハンターなのかと船長が問いかけると少年は肩を竦めた。
「まさか！　目指してますけどね。まだまだ未熟な見習いです」
「……み、未熟？」
「ええ、もっと鍛えないと試験合格なんて夢のまた夢です」
「そ、そう……なのか……」
どうやら本気でそう思っているらしい少年は少し落ち込んだ表情を見せた。
やがて全てのコンテナを沈めると2人は海中へ消えていった。
残されたのは困惑した乗組員だけ。微妙な空気が流れる中、誰かがポツリと呟いた。
「親父……」
「なんだ」
「あれでハンターになれないんですか……？」

「らしいな」
「親父……」
「今度はなんだ！」
「あいつら何で浮かんでこないんですかね？」
「俺が知るか!!」
やけくそのような船長の叫びが辺りに木霊した。

■

海底に沈んだコンテナを回収する作業は骨が折れた。
ワイヤーで繋がっているから壁の中から引っ張ればいい。そう安易に試した結果、途中でワイヤーが切れ、最後の数個は暗闇の中、円だけを頼りに探し回るハメになった。
急がば回れ。先人の残したことわざはやはり正しかった。
「疲れたーーーー！」
「タローはいつもそれだな」
「ピンピンしてるカイトがおかしいだけだから」
堅をしながら円を広げるという訳のわからない高等技術を即興でやれされ、オーラも

体力も限界に近かった。
倉庫に運び込んだコンテナの一つを背もたれ代わりにして座りこみ愚痴をこぼす。
「お前は堅にオーラを回し過ぎなんだ。あと3割は減らせるだろ」
「あー……」
「組手の時も思ったが、攻撃はともかく防御となると必要以上にオーラを込める癖があるな」
「た、確かに」
否定するには思い当たる節が多すぎた。
傷つきたくないし、痛いのは嫌いだ。考えるまでもなく、それが原因だろう。
「理屈はわかるんだけど、難しいんだよ」
「どこがだ？　相殺すればいいだけだろ」
的外れなアドバイスに乾いた笑みが漏れた。簡単にできれば苦労していない。
「円は俺の何倍も広いくせに」
「得意分野だからね。形も自由自在だよ」
そういうと広げたオーラの形を次々に変化させる。
ハートに星形、猫に犬。最後は羽のはえた馬まで。
「ほら見て！　ペガサスー!!」

そう言って変化させたペガサスの羽をはためかせると、カイトは額を抑えてうめいた。
「そっちの方がよっぽど高等技術だろ……」
「俺にはこっちのが簡単なんだよ」
頭でイメージを作って変われと念じるだけなのだ。たったそれだけ。
だが、堅の方は違う。これ以上オーラを減らせば相手の攻撃が貫通する。そのギリギリを狙うなんて……目算を間違えたら大怪我するじゃないか。
「間違えなきゃいいだけだろ」
「いや、だからさー……」
「2人ともごめーん！」
甲高い声が倉庫内に響いた。会話を中断し扉に視線を移す。
そこにあったのは一人の女性の姿。よほど急いできたのか、呼吸が乱れ肩で大きく息をしている。
「はあ、はあ……遅れちゃって本当にごめん」
「大丈夫ですよ、レインさん。俺たちもトラブルがあって運ぶの遅かったですから」
この女性の名はアメリア・レイン。この発掘事業の補給や国家への手続きなどの事務作業を一手に担っている人だ。

身長は俺より低く１５０ｃｍを僅かに超えるくらい。ウェービーな茶色のロングヘアを一つに束ね、いつも目の下にクマを作っているのが印象的な人だ。

事務作業にかけては右に出る者がいない実力者だがハンターではない。というか以前の俺と同じもやしっ子だ。

「今日到着した潜水艦にジャーナリストが潜り込んでたのよー。口止めやら情報ルートの特定やらで時間食ちゃって……」

「アハハ、ご愁傷さまです」

潜水艦。そうなのだ。実は泳いでここに来た人間はジンさんにカイト、師匠と俺だけで、他の人たちはこのレインさんが手配した深海調査用の潜水艦に乗ってきたのだ。

この話を聞いた時、初めて師匠を殴りたいと思った。

俺の苦労は何だったのかと……まあ、今ではすっかり泳いで往復する生活になれてしまったが。

「これが今月の補給物資ね」

「はい、納品書です」

船長から受け取っていた書類を手渡すとレインさんは素早く注文書と照らし合わせた。

「頼んだ分は全部着てるわね。じゃあ、仕分けていきましょうか」

「了解です」
仕分け作業といってもコンテナから物資を出して、食料品は冷蔵庫にその他の物品は種別ごとに並べるだけ。特に難しいことは何もない。
レインさんの指示は的確で小一時間もすればコンテナの中身はすっかり空になった。
これで俺たちに任された仕事は終わり。だったはずなのだが……。
飯でも食おうと倉庫を出ようとした俺の腕にレインさんのそれが絡まった。
柔らかい感触を肌に感じ、顔に熱が集まる。
「ど、どうしたんです？」
「タロー君は行っちゃダメ」
「え？」
もしやデートのお誘いかとぬか喜びした俺に分厚い書類の束が渡された。
ふ……そうだよな。ええ、わかってましたとも。
ここに来たばかりの頃、紙に埋もれる彼女を見るに見かねて仕事を手伝ったのだが、それ以来、事あるごとに呼び出されこき使われている。
「タロー君がいてくれて本当に助かるわ。一緒に夜明けのコーヒーを飲みましょうね」
「ベットの上なら喜んで」
「そのセリフ、１０年早いわ」

口説き文句は軽くあしらわれ、更に書類の束が両腕に乗せられた。
この量をこなす頃には本当に朝になりそうだ。
カイトにも手伝って貰おう。そう思って周りを見渡すがすでに逃げたのか、影も形もなかった。
「タロー君専用の事務机とパソコンも手配済みよ」
「ぬかりないですね……もちろん、お手伝いさせて頂きますとも」
正直な所、遺跡の調査や古代文字の解読などと違って、役に立てると自信を持って言える分野である。
雪崩を起こしそうになった書類を抱え直し、素直にレインさんの後ろを追った。

■

カタカタとキーボードを打つ音が響く薄暗い室内。時折ライターの着火音が聞こえるくらいで驚くほど静かだ。
入力が終わった書類を脇へ置き、ディスプレイから顔を上げる。
凝った筋肉をほぐすために首を軽く回すと関節が小気味いい音をたてた。
横を見るとこの部屋に入った時から高さの変わらない紙の束が見える。

「レインさん、また勝手に乗せましたね……」
「気のせいよ」
「絶対違うと思います」
すでに12時間が過ぎているが解放される気配はない。
処理する速度より積み上げられる方が早く、終わりが見えない作業に少しうんざりしていた。
「一旦、宿舎に戻っていいですか?」
そう願い出ると、レインさんは咥えタバコのまま振り返った。
「一緒に地獄を見ましょうよ」
「お断りします」
ハッキリ、キッパリ断ると両手を祈るように胸の前で組み上目遣いでこちらを見つめた。
「私を1人にしないで?」
からかわれている、完全にからかわれている。
わかっているのに谷間に目がいってしまう。
「……誤解されるような言い方は止めて下さい。お腹もすいたし、シャワーも浴びたいんですよ」

「マメな子ね。私なんて2日はお風呂に入ってないわ」
「貴方、本当に女性ですか……？」
「タロー君は女に夢を見過ぎ。実態なんて皆こんなもんよ」
「レインさんだけが特殊なんだと思わせて下さいよ……」
「うん、隠してるだけ。また忙しくなったらお願いね」
師匠は解読で忙しく、修行を見てもらえないので手伝うのは一向に構わないのだが、レインさんといると俺の中の女性像がガラガラと崩れていくのが問題だった。
頼みますから、胡坐をかいてタバコを吸うのは止めて下さい。後、仮にも男が同じ部屋にいるんですから化粧くらいして下さい。マジでお願いします。
レインさん、男だったら完全にオヤジですよ……。
痛む頭を押さえつつ、とにかく許しは貰えたとマウスを操作してパソコンの電源を落とす。
だが帰るべく一歩踏み出した所で呼び止められた。
うんざりした顔を向けるとレインさんはニコリと笑って封筒を差し出す。
「帰るついでにジンにサイン貰ってきて」
宿舎とジンさんが入りびたる中心部は正反対の方角だ。どこがついでなのだろうか。
突き返したい気持ちで一杯だったが相手は女性。憤りを飲み込みながら封筒を受け

取り、急いで部屋を出た。
これ以上用事を言いつけられてはたまらない。

手伝いの間に体力はともかくオーラは満タン近くまで回復している。
足先にオーラを集め建物の間をリズムよく縫って中心部へ向かう。全力で飛ばしたおかげで5分も立たないうちに地面に開いた大穴が見えた。
壁に取り付けられたライトのおかげで底までくっきりと明るい。
移動用に設置されたエレベーターへ近づくと、地下に向かう人たちで長い行列ができていた。
一度に乗れる人数は5人ほど。ざっと見ただけで待ち時間は1時間を切ることはなさそうだ。
いつもなら素直に並んだだろうが、今はさっさとサインを貰ってご飯を食べたい気持ちで一杯だ。
列の横を通り抜け、エレベーター側面に手をかけるとそのまま一気に滑り降りた。
落下速度はぐんぐん上がり、地表が近づく。
目測１００ｍを切った所で握る力を強め、ブレーキを掛ける。
無事大地に足を降ろすと目前には細長い……所謂オベリスクのような青い塔がひと

きわ高くそびえ立つ中心部を囲うように並んでいる。
壁面はデコボコした石材で作られ、泳ぎながらモリで魚を突き刺している人間の壁画がいくつも描かれていた。
塔の足元では何人もの人たちがチームを組み、小さな刷毛やピンセットで壁画の目地に詰まった砂粒を取り除いている。
気の遠くなるような作業を横目で見ながら歩き、中心部の塔の扉をくぐる。
辺りを見回し、限界まで円を広げて探してみたがジンさんの気配はなかった。
「困ったな」
絶対にここにいる思ったのに……外の作業員に訪ねてみるかと踵を返し、再び扉をくぐった所で上空から俺を呼ぶ声が聞こえた。
ハッとして頭上を仰ぐと、円錐形に尖った塔の頂上からジンさんが俺に手招きしていた。
「まさか……来いと?」
小さく呟いた言葉は何故かジンさんの耳に届いたらしく、大きく頷いた。
「マジか……」
この塔に階段は存在せず、あの場所まで行くには壁を伝うしか方法がない。
何でこうジンさんが関わると、ありとあらゆる事が命がけになってしまうのだろう?

今回だって書類にサインを貰うだけなのに。

だいたい、塔に彫られた壁画は学術的に貴重な物だろう。足蹴にしていいはずがない。

壁を傷つけずに登るとか器用なことは絶対俺には無理だよ……。

「まあ、いいか。いざとなったら責任とるのはジンさんだし」

靴を脱いで裸足になり、手足に砂を擦り付ける。滑り止めの代わりだ。

息を整え、小刻みにジャンプを繰り返し、最後に深くしゃがんで垂直に飛び上って塔へ取り付いた。

「うわわわわっ――」

予想より滑る、滑る、滑る。

四肢に力を入れカエルのように張り付くとようやく落下が止まった。

一瞬見えた地表にキモが冷えた。

石と石のつなぎ目に爪を立て少しづつ、だが着実に登っていく。

途中、爪を引っかけそこねヒヤリとする場面はあったものの、何とか頂上までたどり着いた。

俺は頑張った。物凄く頑張った。それなのにジンさんの第一声は非道だった。

「おっせーな。この程度に30分もかけるんじゃねーよ。次は15分で登ってこい」

「ジンさん……アンタやっぱ鬼だ」
少しは労りの言葉も欲しい。
涙が枯れ果てそうだ。
折れそうな心を気合いで補強して懐の封筒を差し出す。
「サイン下さい」
「お前……これのために登ってきたのか？」
「ええ、レインさんに頼まれたんで」
「なんだよ、俺はてっきり……」
ジンさんの歯切れが悪い。明日は雨かアラレか、それとも嵐か。
「てっきり？」
「中を見に来たのかと思ったんだよ！」
そう言うやいなや、腕を捕まれ塔に向かって放り投げられた。
何故？　どうして？　疑問符が脳内で渦巻き、気付いた時にはもう壁が目前にまで迫っていた。
受け身を取ることさえできず、ただ衝撃を弱めるためだけに丸めた身体は――
「え……？」
壁の中へと吸い込まれていった。

第八話　【原作前】

通り抜けた瞬間、眩い光が瞳を焼いた。思わず、目をきつく閉じ両手で覆う。
痛い……という程ではないが、薄暗い人工の明かりに慣れた瞳には少しきつい。
手のひらで光を遮りながら薄目を開けると、幻想的な光景が広がっていた。
それほど広くはない室内のど真ん中、空中に浮かんだ丸い物体。それが光の正体だった。
くるくると自転しながら青い壁を、天井を、照らす球体の姿はまるで太陽のようで。
自分が海の上に立っているかのごとく錯覚してしまいそうになる。
非現実的な光景にゲームの世界にでも迷い込んだのかと一瞬、本気で考えてしまった程だ。
「どうだ？　すげーだろ」
かけられた声に振り返ると、ジンさんが我がことのように自慢げに胸を張っていた。
罪悪感など全くないようすに呆れながらも頷く。
「これは何なんですか？」
「バーカ、それが知りたいから調べてんだろーが。たぶん、遺跡の心臓部だとは思うが」

苦々しい表情で漏らすジンさんは心底悔しそうだった。
この人でもこんな顔をするのか。意外に思いながら辺りを見渡していると、球体の下に四角い台座があるのが目についた。
近寄って観察すると石碑か何かなのか、表面にびっしりと古代文字が彫られている。
何を目的にした施設なのか、そしてこの文字の意味は。好奇心が湧きあがり、指でそっと文字をなぞった……瞬間、触れた文字が白く光を放ち始めた。
驚いて指を離すと文字は光を失い、元の姿に戻った。
安心してホッと一息をつくが、興奮したジンさんに襟元を掴まれガクガクと前後に揺すられる。
「お前、何やった?!」
「さ、触っただけですよ!!」
「俺の時は何も起こらなかったんだぞ!」
「知りませんよ！　ってか、苦しいです。ギブギブ！」
ジンさんの二の腕を強く叩き、抗議するとようやく喉元の圧迫がなくなった。
「……特殊な一族の血でも引いてんのか?」
「ないない」
速攻、手を左右に振って否定する。

特殊と言えば特殊だけど、それを言うならジンさんのがよっぽど特殊だ。
この遺跡に日本的な感性は欠片も感じない。遥か以前に飛ばされた日本人が作ったと言う仮説は無理がありすぎる。
古代ヨーロッパ文明の方がよほど似てるだろう。
俺の返事を聞いたジンさんは口で何事かを呟きながら考え込んだ。
「じゃあ、俺とお前の違いは何だ？」
「さっぱりわからないです」
「うーん……」
空間全体を彷徨っていたジンさんの視線が俺で止まった。
瞳が大きく見開かれたかと思うと頭を思いっきり叩かれた。
「何すんですか！」
「違いあるじゃねーか！　凝してみろ、このバカ！」
言われるがままオーラを集め、ジンさんと己を交互に見つめる。
「あ……っ」
すぐに気付いた。
ジンさんのオーラは垂れ流し、一方、俺のオーラは危険度マックスな状態が続いたため、無意識に練をしていたようだ。

「見てろよ」
そう言うとジンさんは薄いオーラの膜を張った指先で石碑をなぞる。
次々と浮かんでは消える白い光にジンさんの顔も楽しげに輝いていく。
ジンさんが楽しいのは結構だが、ここの文字はまだ解読されていないのだ。
この空間が作られた目的も、文字が表す意味も分からないのに、そこまで弄繰り回していいものだろうか……。
不安にかられ、声をかける。
「ジンさん、そろそろ止めときましょうよ」
「冗談いうな。いいか、もっとよく見てみろ」
そういうジンさんに促され手元を覗きこむ。
同じようになぞっているのに、光る文字と光らない文字があることに気が付いた。
「発光しない文字は恐らく接続詞や副詞みたいなもんだろ。形が4種類しかないだろ？」
「ほんとだ……」
接続詞とは文と文、節と節、句と句、単語と単語を繋ぐ記号だ。『～だから～である』みたいな単体では意味をなさない言葉や文字のこと。
やっぱりジンさんは興味があることに関しての知識は凄い。難しい単語がぽんぽん

でてくる。聞き役が俺じゃなくて、ゴンだったら確実に頭が爆発してるだろうな。
「つまりだ。発光した文字は品詞ってことだ」
なるほど、何か意味のある文字列ということか。
難航していた解読にはずみがつくな。
「ははあ……じゃあ、師匠を呼んできますね。後、レインさんにも警告しないと」
「リーシャンはともかく、レインは何でだ？」
「だって弄った結果、外の壁がなくなりでもしたら大災害ですよ？」
俺たち４人以外は、壁がなくなれば即死だ。
遺跡はともかく、ここに集まった人たちは各分野のトップも多い。失われるであろう人的損害はとてつもないレベルになるはずだ。
それに、ジンさんの興味ごときで水没して溺れ死ぬとか、死んでも死にきれないに違いない。
「レインさんと相談して待機する潜水艦の数を増やして、作業員の人たちも一旦中断で宿舎に戻ってもらいます。そうだ。万が一の場合のパニックを抑えるための避難訓練も行わないといけないですね……」
「やりすぎじゃないか？　潜水艦だけでいいだろ」
「ダメです。これだけの人数が一斉にパニックを起こしたら、それだけで死人がでます」

「んな根性のない奴らを集めたつもりはねーぞ」
「それでもです」
押し問答を何度も続けた結果、俺が折れる気がないとわかったのか、ジンさんが珍しく両手を上げた。
「好きにしろ」
「そうします」
勝った。
拳をグッと握り、初勝利を密かに祝う。
「準備があるので俺は戻りますね」
「おう、リーシャンを呼ぶのを忘れんなよ」
「わかってます。あ、それと最低でも潜水艦が揃うまでは触るの禁止ですよ」
「……おう」
一呼吸置いた返事に不安になった。
早く、師匠を呼んでジンさんを見張ってもらわなければ……。
封筒を受け取り、宿舎へ急いだ。

■

その後、はやりジンさんの推測通りだったようで、難航するあまり暗かった師匠の雰囲気も生き生きとした物になり、日々着実に解読が進んでいる。

一方、俺はと言えば、安全のための手配や補給が終わった後は、レインさんを手伝ったり、カイトと一緒に深海を探検して未確認生物を発見したり……。

働いて、遊んで、怒って、笑って。

1日中ヘトヘトになるまで動き回り、気づけば夜になっている……そんな毎日。

日がな一日読書に励むだけだった俺が、こんな健康的な日々を送れるなんて冗談みたいだ。両親が聞いたら目をむくに違いない。

――と思考にふける俺へ抗議か、カイトの右ストレートが迫った。

慌てて飛びのいて距離を取る。

「よそ見をするな」

「ごめん」

「随分、余裕だな。なら、もっとスピード上げてくぞ」

「それは勘弁して下さい」

速攻で土下座して許しを請う。

実は今、カイトに修行をつけてもらっていたのだ。応用技や系統別訓練は自主練でも

何とかなるのだが、オーラの攻防だけは一人では出来ない。
頭を振って雑念を振り払い、腕を構える。
攻防の練習なので向かってくる攻撃のスピードはそれ程早くはない。
凝でしっかり見極め、必要な分のオーラだけを回している……つもりなのだが。
「お前、ギリギリの意味わかってんのか？」
「わかってますってば……」
やはり多めにこめてしまうオーラにカイトの苛立ちが蓄積していく。
頭ではわかっているのに身体がついていかず焦りがつのった。
思いとは裏腹にどんどん頭と身体の連携は悪くなる一方で……。
攻防組手を初めて1時間も経つ頃には、カイトのイライラは頂点に達した。
「……わかった。タローは攻防よりも、痛みに慣れる方が先だな」
「は？」
いつもとは違う冷たい声色に驚いて問いかけるがカイトは答えず、膨大なオーラを練り上げ始めた。
ピンと張りつめた空気が辺りを支配し、冷汗が背中を伝う。
「本気で行く。無制限一本勝負だ」
「ちょっ！」

一本って何!?　そう聞き返す暇もなく、嵐のような拳の連打が襲いかかった。
カイトの本気。そんな攻撃を受け切れるはずもなく、腕が足が、防御に使った部位が悲鳴を上げる。
「カイト……カイトさん！　落ち着こう。俺、死んじゃうよ!?」
「喋る余裕があるなら問題ない」
「いやいやいや、んなわけないでしょ」
問題ありまくりである。
「一本獲ったら終わるんだ。気合い入れろ」
完全に趣旨から外れている。
一本の意味はもしかしたら骨のことなのかもしれない……そんな恐ろしい考えが頭をよぎった。
もう道は一つしかない。逃げるのだ。
脳を必死に回転させて方策を探る。
逃げるには隙を突くしかないが、カイトにそんな物があろうはずもなく、何とかして作り出すしかない。
考える間にも連打の雨が止むことはなく、作戦がまとまった頃には両腕は真っ赤にはれ上がっていた。

作戦名は肉を切らせて逃げを打つ。
これしかない。骨を断つと言いたい所だが、んなマネしたら確実に俺の命が断たれる。
残り少ないオーラで前方にだけ堅を張る。
防御を捨てた脇の部分にカイトの拳が掠り、皮膚が切れる嫌な感触を感じた。が、歯を喰いしばって円を広げる要領で堅の塊を一気に放出した。
迫りくる分厚いオーラの層に流石のカイトもわずかに怯んだ。
その隙を逃さず、後方に1回転。
距離にしてほんの１０ｍ。だが、逃げるには十分なはずだ。
「ごめん、カイト」
捨て台詞を残して人気の多い寄宿舎の方角へ飛んだ……はずだった。
「いい攻撃だったな。次いこうか？」
何故か、俺の足首をガッチリ掴んでいる手。万力のように強力なその手は見る見る間に締める力を強めていく。
そのまま力任せに引きずられ、元の場所へと戻される。
俺に出来るのは白旗をあげ、謝り倒すことだけだった。

■

「さっきのはタローの発なのか？」
　俺のオーラをボロ雑巾のように絞り取り、ようやく気が晴れたのかカイトが動きを止め、そんな疑問を投げかけてきた。
「違うよ。候補ではあるけどね」
　師匠に言われた1年の開発禁止期間はとっくに過ぎた今、欲望を抑えきれなくなった俺はちまちまと暇を見つけては能力開発の実験を行っている。
　小説やアニメを元に、役に立ちそうな能力を色々と手帳に書き留めてはいたのだが、実現させるとなると制約が多くなりそうだったり、そもそも実現方法が思いつかなかったりと、いまいち上手くいっていない。
「どんな候補があるんだ？」
「そういうのってマナー違反じゃないんだっけ？」
「いいじゃないか、候補なんだろ？　まだ」
「ま、いいけどね」
　俺はカイトの能力を知ってる訳だし。
「さっきのは昔見たアニメに出てきた技から考えたやつで、オーラを分厚い壁っぽいも

のに変化させて身を守る能力」
「お前らしいな」
「お褒め頂き、ありがとう」
「他には？」
　続きを促すカイトに手帳の内容を思い浮かべながら、次々と能力候補たちを上げていく。
　最初はワクワクとした表情で聞いていたカイトだったが、だんだん険しくなり最後には頭を抱えた。
「お前な……強い能力が欲しいのはわかるが、無茶苦茶だ。特に何だ、サテライトトンボとかいうのは。具現、操作、放出とか系統無視にもほどがある」
　いや、実際に未来で作られる能力なんですけど。そう言いたいのをグッと堪え、反論を唱える。
「そこは制約と誓約で何とかならないかなー……と」
「なるわけあるか！」
「ですよねー」
　トンボと混じったからこそ出来た能力なのだろう。それにしても、考えた能力を全否定とは酷い。まあ、ほとんどパクリまくった物だけど。

能力の第一条件は、身を守れる力があること。逃げるとか防御するとか、そんな感じだ。

第二条件は、お金を稼げそうな能力であること。

要らないと言われても、やっぱり生活費くらいは返すのが筋だと思っている。

でも念を覚えた今では、会社勤めをする気にはなれないので、出来れば能力を使って食っていきたい。

この条件を話すと、カイトは顎に手をあてて考え込んだ。

「難しい条件ではないと思うが、メインは何系なんだ？　候補とか言うのは系統がバラバラで想像がつかん」

痛い所を突かれ、そっぽを向いた。

「あー……実はさ、俺、自分の系統知らないんだよね」

「はあ?!」

いや、だって師匠が水見式をしようって言ってくれないから。

何故知っているかと聞かれると困るから自分で言い出せる訳もなく、隠れてコッソリやる度胸もなく。ずるずるとそのまま来てしまっている。

「バカだな。お前、本当にバカだな」

「それはもう重々承知しております……」

正座させられ、こんこんと説教を受けさせられる。
もちろん反論や異論があるはずもない
「順序が逆だ。まずは系統を調べて、それから能力だろうが！」
「全く持って仰る通りで……」
「――――ったく、行くぞ」
「どこに？」
「リーさんの所だ。俺が調べてもいいが筋違いだからな」
そう言うとカイトはくるりと背を向けて歩き出した。
慌てて後を追いながら、師匠になんと説明したものか頭を捻った。

■

突然、師匠の宿舎を訪ねた俺たちに師匠は怪訝な顔を隠さなかった。
俺は毎日来ているが、カイトが師匠の部屋まで来るのは相当珍しいので、またトラブルでも起きたのかと思ったらしい。
俺の系統を調べたいとカイトが単刀直入に切り出すと、師匠の目が大きく見開かれた。

「それは構いませんが……いきなりどうしたんです？」
困惑する師匠の答えは至極もっともなことで。
俺は出来ればオブラートを何重にも重ねて柔らかい表現で説明したかったのだが、カイトは俺が系統も調べずに能力開発をやっていたと、言い訳のしようもない事実を話してしまった。
「タローー……」
「す、すいません」
師匠の鋭くなった眼光に、恐怖で身を縮めカイトの影に隠れた……が、許されるはずもなく、師匠の指がソファを指した。
「そこに座りなさい」
説教第二弾の到来である。正座でない分、師匠の方がカイトより優しいが連続は堪えた。
1時間以上に及ぶお叱りを受けた後、精神はどん底まで落ち込んでいた。
いや、俺が悪いんだけどさ。
「タローも反省したようですし、やりましょうか」
ヘロヘロになってソファに崩れ落ちた俺の目の前に、緑の葉っぱが浮かんだガラスのコップが置かれた。

意味を理解した途端、現金な俺の気分は一気に急上昇。顔が緩み、笑顔が零れた。
「お前な……」
呆れたカイトの声も今は気にもならない。
待てをされた犬のようにコップの前で背筋を伸ばし、師匠の命令を待つ。
俺に尻尾があるならぶんぶんと振られていること間違いなしだ。
「さて、何系統でしょうね？」
「俺は具現化がいいです！」
「あのな、希望通りになるとは限らないんだぞ」
「わかってるよ、そんなこと。カイトはどう思う？」
「変化だろ。あのやたら精密な技術から考えて」
「師匠は？」
「タローは放出が苦手ですから……変化か、具現か、特質でしょうね」
「リーさん、一つに絞らないと予想になりませんよ」
「では、弟子の希望を入れて具現にしておきましょう」
「勝った！　２対１!!」
「多数決で決まるわけないだろ」
「俺のこと一番知ってる師匠がそう言ってるんだよ？」

ぎゃいぎゃいと始まった言い合いを師匠が軽く頭を叩いて止める。
「すぐにわかるんですから……ほら、コップに練をしなさい」
ヨシの合図と共に今までにないスピードでオーラを練り上げ、コップへ傾ける。
わくわくとした気持ちでコップをジッと見つめていると、白い塊が次々と水中に浮かんだ。
結果はもちろん――。
「具現化系ですね」
「ヨッシャ――――!!」
願望通りの結果に、盛大にガッツポーズを決めた。
「サテライトトンボはダメだぞ」
大喜びではしゃぎ回る俺にカイトが水を差した。
「わかってるって」
「じゃあ、どんなのにするんだ？　あの何とかってポケットか？」
「ポケットとは何です？」
「タローが考えた能力で４次元空間に色んな物を詰める能力だそうです」
「便利そうですが、何故ポケットなんです？」
漫画の設定だからです。とは言えず、適当にごまかす。

こっちドラ〇もんないんだよね……。
確かに便利ではあるが、中から未来道具が出てくるはずもない。そう考えるとノブの4次元マンションの方がよほど凡庸性がある。
というか、あれがそのまま欲しいくらいだ。
向こうにいる時の欲しい能力ナンバーワンだったし。ちなみに次点は梟のファンファンクロスだ。
流石に原作をそのまま持ってくると、もし本人に会った時に言い訳のしようがないので、そのまま流用する気はないが。
色々な案が脳裏に浮かんでは消える。
「師匠、質問があるんですけど……」
「何です?」
「具現化と特質が隣り合わせなのは、具現化した物体が特質系の能力を持ちやすいからなんですよね?」
「ええ、操作にも言えますが、具現化が一番その傾向が強いですね。あくまで、具現化した物体に可能な範囲と注釈がつきますが」
「可能な範囲……」
シズクの掃除機が物を吸い込む機能がついているのが当たり前だし、梟の風呂敷も包

めて当り前……つまり、俺が欲しい能力が出来て当たり前な具現化物を選べばいいわけか。

とすると――……ピコーンと脳内の豆電球に明かりが灯った。

「いい物を思いつきました！」

「まて」

早速、修行に入ろうと席を立った俺の首根っこをカイトが掴んだ。

こういう所はジンさんにそっくりである。

またもや引きずられてソファに逆戻りさせられた。

「いいか、作る前に必ずリーさんに相談しろ」

「は？」

「は、じゃない。お前1人で作らせるのは不安だ」

どうやら俺の候補がよほど気に要らなかったようだ。候補は候補であって、系統もわかった今、メインの具現化から離れた能力にするつもりはない。

「大丈夫、大丈夫。部屋に行って取ってくるからここで待っててよ。師匠とカイトに反対されたら諦めるし」

「ならいいが……」

不満そうなカイトと裏腹に俺の気分は絶叫調だった。ルンルン気分でスキップをし

ながら自室がある宿舎へ向かい、持ってきた荷物を漁る。

元々、着替え以外の荷物はそう多くはない。数分で見つけ出したそれを手に大急ぎで元来た道を戻って行った。